

## ◎日露戦争

### 日露戦争ノ起因

露国ハ西曆千八百五十年以来「ピーター」大帝ノ遺業ヲ嗣ギ翼ヲ東亜ニ伸シ絶東ニ

不凍港ヲ得ントスル念頗ル切ナリ而シテ我帝国ガ明治二十七・八年清国ト釁ヲ開キ幾多ノ生靈ヲ屠シテ遼東ノ地ヲ占領スルヤ独仏二国ト共ニ極東平和ヲ害スルモノトシ之ヲ清国ニ還付セシム然ルニ彼レハ明治三十一年旅順大連ノ要港ヲ租借シ且ツ此ノ二港ニ通ズル鉄道敷設ノ特許ヲ得爾後東清鉄道ノ経営ニ最モ留意シ着々其歩ヲ進メタリ後二年拳匪ノ乱アルヤ隣国制規兵モ加リタル団匪ハ滿州ニ於テ鉄道隊ヲ駆逐シ鉄道線路ヲ破壊セリ露国之ヲ機トシ兵ヲ派シテ鎮定シ明治二十一年清国ト協商ヲ締結シテ滿州ヲ占領シ清国ノ地方行政ハ露ノ統轄ヲ受テ関税ハ露国官憲ニ収メ通商鉄道及鉱山ノ特許（専ラ露人ニ与フルコト）ナレリ然ルニ是等ノ制限ハ元ヨリ清国ノ保全及門戸開放ノ政策ニ反スルガ故ニ我帝国政府ハ先ヅ抗議ヲ提シ諸強国亦之ニ倣〔倣〕ヘリ而シテ遂ニ日英同盟トナリ露国ヲシテ其幾分ヲ讓歩セシムルニ至ラシメ明治三十六年十月ヲ期シ兵ヲ滿州ヨリ撤スベキヲ明言セシメタリ然リト雖モ倭奸ナル露国ハ益々猛威ヲ逞フシ或ハ邦人ノ滿州ニ於ケル企業ヲ妨碍スルノミナラズ之ヲ放逐シ或ハ彼ノ露国木材会社ハ鴨綠江沿岸ノ森林ヲ利用セントシ加フルニ其作業保護ノ為メ武装セル衛兵ヲ朝鮮国内ニ入ラシムルニ至レリ是ニ於テ露ノ横暴ニ激昂セル帝国ノ輿論ハ益々激昂シ明々地ニ戦争ヲ迫リテ休マザルニ至レリ

然ルニ露国（陸軍大臣「クロパトキン」）將軍ヲ日本ニ派シ事態ヲ明カニシ兼テ絶東ニ於ケル露国ノ軍備ヲ實地ニツキ調査セシメタリ將軍ノ温容ハ帝国ノ激昂ヲ稍々和ゲタルモ彼ハ其形勢急ナルヲ察シ益々東亜ノ戦備ヲ急ギ或「旅順一」堅塁ヲ増築シ築港規模ヲ拡大ニシ且ツ多大ノ糧食ヲ集メ又露本国ノ精兵ヲ絶東ニ移送セシメタリ

明治三十六年七月二十八日我外務大臣小村男ハ在彼得堡栗野公使ニ命ジ要旨左ノ如キ提案ヲ為サシメタリ

- 一、清韓兩國ノ独立及領土保全
- 二、朝鮮ニ干涉スベキ絶対的權利
- 三、朝鮮鉄道ト滿州鉄道トノ連絡

然ルニ露国政府ハ帝国政府ガ急ニ事ヲ決セシ事ヲ迫リタルモ戦備ノ時間ヲ得ント欲シ漸ク十月三日ニ至リ回答ヲ得タリ然レドモ露ハ却テ我が要求ヲ承認セズ韓国ニ於ケル日本ノ行動ニ干涉シ尚日本ニ於テ滿州地方ニ於ケル利益範圍外ナルコトヲ承認センコトヲ要求セリ抑モ露ノ滿州占領ハ韓国ノ保全支持スベカラズ韓国ノ存亡ハ實ニ帝国安危ノ繫ル所故ニ日本ハ従来ノ如ク其希望ヲ貫徹セントシテ止マズ再三露国ニ向テ協商セリ

而シテ其功ナシ且ツ露国政府ガ依然戦備ノ為メ時間ヲ得ントスル目的ヲ以テ談判ヲ遷延セントスル意図アルヲ看破シ遂ニ明治三十七年一月十三日催告ヲ発シ更ニ爾来我が讓歩セシ事項ヲ抹殺シ益々滿韓ニ於ケル日本ノ利益ヲ保護セントシ且ツ速ニ回答スルニアラザレバ却テ兩國ノ為メ非常ニ不利益ナルコトヲ以テセリ二月六日帝国政府ハ露国ガ日本ノ提案ニ対シ了解スベキ理由ナクシテ屢々回答ヲ遷延シ加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事活動ヲ以テスルハ最早商議ヲ断ツノ外撰ブベキ道ナク且ツ日本帝国ハ其侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ且ツ防禦スル為メ並びに帝国ノ已得權及ビ正当利益ヲ擁護スル為メ最良ト思惟スル独立ノ行動ヲ採ルコトノ權利ヲ保留スル旨ヲ通告シ之ニヨリテ是マデノ商議ヲ断絶シ日本公使ヲ彼得堡ヨリ召還スル旨ヲ通牒セシメタリ已ニシテ二月八日九日ニ旅順口外ニ戦鬪ヲ開始スルノ己ムヲ得ザルニ至リ遂ニ明治三十七年二月十日帝同政府ハ左ノ宣戰ノ詔勅ヲ公布シ露政府ハ宣戰布告書ヲ発表スルニ至レリ

#### 宣戰詔勅

天祐ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐ミタル大日本帝国皇帝ハ忠実勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露国ニ対シテ戦ヲ宣ス朕力陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露国ト交戦ノ事ニ從フヘク朕力百僚有司ハ宜ク各其職務ニ從イ其權能ニ応シテ国家ノ目的ヲ達スルニ努カスヘシ凡国際条規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ尽シ違算ナカラシメンコトヲ期セヨ惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列国ト友誼ヲ篤クシ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各国ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝国ノ安全ヲ将来ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ国交ノ要義ト為シ且暮敢テ違ハサルコトヲ期ス朕力有司モ亦能ク朕力意ヲ体シテ事ニ從ヒ列国トノ關係年ヲ逐テ益親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露国ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕力志ナランヤ帝国ノ重ヲ韓国ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓国ノ存亡ハ實ニ帝国安危ノ繫ル所ナレハナリ然ルニ露国ハ其清国トノ明約及列国ニ対スル累次ノ宣言ニ拘ハラズ依然滿州ニ占拠シ益々其地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿州ニシテ露国ノ領有ニ歸セン乎韓国ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕（此機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ有司ヲシテ露国ニ提議シ半歳ノ久シキニ至リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露国ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメントス凡ソ露国力始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露国既ニ帝国ノ提議ヲ容レス韓国ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝国ノ国利ハ將ニ侵迫セラレントス事既ニ茲ニ至ル帝国力平和ノ交渉ニ依リ求メントシタル将来ノ保証ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠実勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝国ノ光榮ヲ保全センコトヲ期セ

ヨ

明治三十七年二月十日

- 4月19日 午前十時動員下令あるや、聯隊長は將校を聯隊本部に集め動員下令を達し、戦時職務を命課し、三十六年度動員計画に基き、出師準備に着手せり。
- 20日 予備役中少尉見習士官十七名、演習召集として着隊せしも、充員召集の爲め夫々戦時職務を命ず。
- 21日 応召員予備役特務曹長三名、下士以下六十一名到着。
- 22日 応召員千九百三十六名到着。
- 23日 応召員二百五十八名到着。
- 24日 応召員二百五十八名到着。
- 25日 応召員二百五十八名到着。
- 26日 午前十一時三十分、動員完結す。因て之を師・旅団長に報告す。
- 27日 正午十二時、歩兵第十二聯隊補充大隊動員完結す。因て之を師・旅団長に報告す。
- 28日 衛生隊動員完結の旨を師団長に報告。
- 29日 午前十時、聯隊長は雨を冒し、東練兵場に於て、軍装検査を施行す。將校同相当官に備はるもの左の如し、

聯隊本部

聯隊長	陸軍歩兵大佐	新山	良知
聯隊副官	同 大尉	林田	一郎
旗手	同 少尉	本城剛一	二郎

第1大隊本部

大隊長	陸軍歩兵少佐	久野	廉
大隊副官	同 中尉	鈴木	秦誰
大隊附	陸軍三等主計	石川	五平
同	同 二等軍医	中塚	泰平
同	ヨ同 三等軍医	六車	謙八

第2大隊本部

大隊長	陸軍歩兵少佐	鶴見	帙太
大隊副官	同 中尉	前田	弘
大隊附	陸軍二等主計	鮎川稻次郎	
同	同 一等軍医	里村基三郎	
同	同 二等軍医	井口和一郎	

第3大隊本部

大隊長	陸軍歩兵少佐	志岐 守治
大隊副官	同 中尉	村田 利行
大隊附	陸軍上等計手	岡田奥太郎
同	同 一等軍医	松葉 登
同	同 三等軍医	田村 環
第一中隊		
中隊長	陸軍歩兵大尉	竹内貫一郎
小隊長	同 中尉	中村祐真
同	同 少尉	舟橋 茂
同	同 少尉	三好仙三郎
第二中隊		
中隊長	陸軍歩兵中尉	平田豊三郎
小隊長	同 中尉	高峻 正俊
同	同 少尉	水野 真清
同	同 少尉	桑名 千畝
第三中隊		
中隊長	陸軍歩兵大尉	西川 房吉
小隊長	同 中尉	橋野 万造
同	同 少尉	堀川 忠文
同	同 少尉	大浜石太郎
第四中隊		
中隊長	陸軍歩兵大尉	編本 之茂
小隊長	同 中尉	大浦彦一二郎
同	同 中尉	増田 正春
同	同 少尉	福家 健二
第五中隊		
中隊長	陸軍歩兵大尉	荒牧 光造
小隊長	同 中尉	高本 承彦
同	同 少尉	福島 恪次
同	同 少尉	宮本 義明
第六中隊		
中隊長	陸軍歩兵大尉	加茂 寛直
小隊長	同 中尉	大野 庸六
同	同 少尉	松木喜一
同	同 少尉	山田 永造
第七中隊		

中隊長	陸軍歩兵中尉	津田増次郎
小隊長	同 少尉	勝浦 益衛
同	同 少尉	大隈 一蔵

5月5日 善通寺練兵場に於て師団長は善通寺・丸亀両衛戍地出征部隊の軍装検査を施行す。

21日 19日乗船出征に関する師団命令の要旨に基き、20日林田大尉以下将校2名下士卒32名を詫間碇泊所に先遣し、乗船に関する諸準備をなさしめ、21日午前4時50分、聯隊は営庭に南面して集合し、軍旗を奉迎し、同5時屯営出発し出征の途に上る。村民沿道に充滿し、戸々国旗を掲て煙火を揚げ、大に行を壮にす。將士意氣衝天、隊伍整々、万歳声裡に午

前9時20分、詫間集合場に到着し、直に荷物材料馬匹の搭載を開始す。其の配船左の如し、

讃岐丸 聯隊本部、第1大隊。  
 第2大隊本部及第5中隊  
 丹波丸 第6、第7、第8中隊  
 胆振丸 第3大隊（第9中隊欠）  
 永田丸 第9中隊

午後1時30分全く搭載終り、午後3時人民歡呼、奏樂の間に碇泊地を抜錨す。

26日 当聯隊を分乗せる4隻の運送船は、相前後して清国盛京省塩大澳張家屯に投錨す。此に於て各輸送指揮官は直に揚陸を開始し、日暮各船共に揚陸を終り、同夜張家屯北方砂地に露營せり。

同夜、師団長より左の命令に接す。

大石橋附近二八千余ノ敵兵アリ。第5師団ハ普蘭店附近ヲ北方ニ面シテ占領シ、第一・第三・第四師団ハ金州附近ノ敵ヲ攻撃ス。第十師団ハ大孤山附近ニ上陸中ナリ。師団ハ李蘭河登沙川ノ中間ニシテ壬家屯・張家屯・壬家溝以南ノ地区ニ集合セントス。本日上陸セシ諸隊ハ明日正午迄ニ所命ノ地ニ転宿スヘシ。

27日 前夜の師団命令に基き、聯隊は左の如く転宿し、村落露營をなす。

聯隊本部及第一大隊	李家屯附近
第2大隊	徐家屯附近
第3大隊	孫家屯附近

左の吉報に接す。第2軍は敵を南関嶺以南に撃退せり。而して聯隊は

明日貌子窓街道を金州に向て前進すべき命令を受領す。

- 29日 午前8時、徐家屯を出発し河口附近に宿營の目的を以て前進せしが、俄然青泥窪攻撃の予定を以て更に前進し、陳家屯に露營す。志氣為
- に
- 振ふ。
- 30日 聯隊は八里庄に向て前進し、聯隊本部及第1・第3日曜日9時から15時の間とする。第2大隊は同地に、第3大隊は七里庄に舎營す。南山
- 戦場の跡血尚ほ醒きを覚ゆ。
- 31日 敗退せし敵の一部は双台溝・分水嶺子附近に停止し、第1・第3日曜日9時から15時の間とする。第3師団は安子山より毛頭子峠を経て台子山に亘る線に在て敵と相對峙せり。仍て師団は第1・2師団と交代する目的を以て毛頭子峠より台子山に亘る線に前進す。聯隊は金祠街道を西進し、午後5時南沙河口に到着し、即時歩兵第6聯隊と交代し、垓塘溝より黒石礁に亘る線の守備に任ず。
- 6月1日 師団は第1師団長貞愛親王の指揮下に入り、2日以後聯隊は守備陣地を漸次強固ならしむることに努め一面偵察隊を派遣し敵情並びに地形の偵察に従事せり。当時我正面の敵は、猪圈子溝より老激山に亘り其の主力は黄泥川附近に位置せしが如し。
- 6日 第1・第11師団は、第3軍戦闘序列に入り、軍司令官乃木大将は本夕亮甲店に到着せり。
- 8日 歩兵中尉田崎又次、同森本重太郎、同平田豊三郎、同津田増次郎、5月24日附を以て大尉に任ぜられ、歩兵少尉堀川忠文、同本城剛三郎、5月24日附を以て中尉に任ぜられ、歩兵中尉本城剛三郎聯隊旗手を免ぜられ、歩兵少尉吉村良聯隊旗手に任命せらる。
- 14日 第2大隊長鶴見少佐は3中隊を率ひ敵情偵察の爲め、午前3時出発し、敵の最前線を撃破して程家屯西方高地に至り敵5名を射殺し、小銃弾薬若干を齒獲し、午前9時帰還す。
- 18日 午後四時二十分、敵の巡洋艦1・砲艦1・駆逐艦水雷艇10艘、小平嶋沖に現はれ、我が守備陣地に向て数十発の砲撃をなせしが、午後5時20分我が艦隊の水平線上に現出するを見るや、直に退却せり。我に損害なし。
- 22日 第七中隊長大尉津田増次郎をして鷄冠山附近の敵情偵察をなさしむ。第七中隊は午前2時30分南沙河口を出発し、鷄冠山の敵を駆逐し、敵を殺傷すること十数名、善く偵察の目的を達し、午前11時帰還す。我に軽傷2名あり。
- 24日 機関砲隊第五小隊を当聯隊に配属せらる。本日第一軍・第二軍・第

- 三軍・独立第十師団は、満州軍総司令官大山大将の指揮下に入る。
- 26日 第11師団は、乱泥橋東方高地及黄泥川大上南西方高地一帯の線に進出するに決し、当聯隊を左縦隊とし、神尾少将の指揮に属せしめ、北河口を経て黄泥川大上屯西方一帯の高地に進ましむ。仍て午前3時30分前哨を撤し、黒石礁に集合し、第二大隊は前衛に任せられ、第三・第一大隊は本隊となり、黄泥川大上屯方向に前進す。午前5時聯隊の史家溝附近に達せし時、敵艦数艘小平島沖に現はれ我に射撃を加へ
- たる後、旅順方向に退却せり。前衛は微弱なる敵を撃攘しつ、双頂山より海岸に亘る間を占領し、本隊の先頭にありし第三大隊は新大麻山附近の敵を駆逐して之を占領し、第一大隊の一中隊は左翼隊長の命に依り黄泥川大上屯東方鞍部を占領し、各方面共に黄泥川大上屯西方高地の敵と相対峙して停止し、工事を施して夜を徹す。
- 27日 第二中隊中尉高嶋正俊に一小隊を附し、小平島に派遣し、該地の守備に任せしむ。
- 28日 第5中隊は上陸後、蔡家屯に於て兵站守備となり、其後亮甲店及金州等の守備に任じ、後備聯隊到着の後、金州より急行して、2小隊は26日夜、1小隊は本日午後北河口利家屯に到着せり。
- 7月2日 聯隊は守備線の右翼を黄泥川大上屯南方高地迄に拡張し、第3大隊をして之を守備せしむ。是に於て聯隊守備線の全長は殆んど五千米突に達せり。午後三時発師団命令に依り軍隊区分変更せられ、第一大隊は
- 新山大佐の指揮に復し、神尾少将は中央隊長に転じ、新山大佐は左翼隊長となれり。
- 3日 敵兵、中央隊の剣山に逆襲せしと同時に、我前哨線たる老座山の線に來襲せり。第5・第11中隊は暫時之と対戦せしが敵兵増加の徴ありしを以て、本防御線に引揚げたり。其後敵は尚ほ前進の模様ありしを以て、第1大隊を黄泥川大上屯東方谷地に招致し、砲兵第二中隊に命じ、老座山の敵を砲撃せしむ。敵は周章狼狽、老座山の西側に隠蔽せり。其後、敵の艦隊老座山沖に現出し、猛烈に我が守備陣地を砲撃せり。殊に鶴見大隊の如きは十字火を蒙り危険なりしも、幸に大なる損害なし。聯隊は各守備隊に兵を配布し、夜間前方に数組の将校斥候を派遣して夜を徹す。
- 4日 中央隊長は我が左翼隊の守備線を老座山の線に進めんことを望みしを以て、加茂大尉に一中隊を附し、午前3時強襲偵察をなさしめしも、敵は優勢にして多大の損害を蒙るにあらざれば、之を占領する能は

ざるを知りしを以て、神尾少将の注意により現在陣地を保持し敵の来襲を待つ。午後一時頃、中央隊の方面に於て銃砲声熾に起りしも、当聯隊正面の敵は活動の様相なし。然れども中央隊前面の敵は午後6時30分に至るも退却せざるを以て、聯隊は依然警急配備を取り夜を徹せり。

5日 中央隊前面の敵は、今朝大白山東方高地に退却せしを以て警急配備を解く。

後備歩兵第一旅団及砲兵第二大隊（二中隊欠）は当師団に編入せられしを以て、師団は更に軍隊区分を変更し、聯隊は再び神尾少将指揮下に入る。

8日 午前一時敵兵暴風雨に乘じ、第三大隊の前哨線に来襲し、我独立下士哨及小哨を突破せんとせり。第九中隊及機関砲は陣地に就き、敵火を目標とし射撃を交換せり。敵は我兵の増加せるを知りたるもの如く、

午前二時半退却し、其後全く平穩に帰せり。

神尾少将の訓令に依り、第1大隊及歩兵第43聯隊第十中隊は聯隊長の指揮下に入りしを以て、聯隊は守備線を一区域に分ち、即ち第一大隊（第四中隊欠）機関砲第五小隊（一分隊欠）を右翼守備隊とし、右翼歩兵第四十四聯隊遠藤大隊に連絡し、黄泥川大上屯西北方一局地より其南方本道に至る間を、第三大隊（第十中隊欠）を中央守備とし、右翼守備隊の左翼本道南側より新大麻山の西北稜線に亘る間を、第二大隊及第十中隊並びに歩兵第43聯隊第十中隊・機関砲一分隊を左翼守備隊とし、双頂山より海岸に亘る間を守備警戒せしめ、第四中隊を予備隊とし、黄泥川大上屯東方部落に宿営せしむ。

9日 以後、毎日両軍将校斥候の衝突、若しくは歩哨と斥候の衝突等ありしも大なる変化なくして二十六日に至る・

26日 軍は本日を期し前面の敵を攻撃するに決するや、左翼隊長神尾少将は25日午後1時攻撃に関する命令を下す。聯隊長は此の命令に基き、午前3時30分迄に第一大隊〔第四中隊欠〕を黄泥川大上屯西方約千米突の谷地附近に、第三大隊（第十中隊欠）を黄泥川大上屯西南約八百米突の部落附近に、第二大隊を黄泥川〔大〕上屯附近に集合せしめ、第十中隊及歩兵第四十三聯隊第十中隊を老座山攻撃部隊の援助隊として黄泥川大下屯附近に位置せしめ、予備隊たる第四中隊を黄泥川大上屯西南約八百米〔突〕の谷地に集合せしめ、以て我砲火の威力を待たしむ。

午前7時40分、双頂山頂の砲兵第二中隊先づ第一発を標高195の高

地に送るや、師団の砲兵之に和し猛烈に敵の前進陣地を射撃す。

午前8時、第1大隊は一躍して黄泥川大上屯西方約二千米突の敵の前進陣地を奪取し、銃火を以て大白山高地の敵と対戦し、午前十時谷地に遮蔽して大白山北麓に前進す。第三大隊は第一大隊に連繫して老座山北方高地の線を占領す。

第2大隊は午前9時老座山敵壘の瞰射を冒して猛進し、老座山真北高地を占領し、以て老座山鞍部の角面堡攻撃に着手す。敵は堅固なる陣地に信頼し、防禦大に努めしも、第二大隊全力を尽して之が攻撃に従事せしを以て北部鞍部の敵は午前十時より十一時に至る間に於て、漸次西方に退却を開始せり。第七中隊は此機に乗じ断崖を攀登し、老座山頂に向て猛進し、奮闘遂に之を占領し、尚ほ一部を以て老座山北斜面の敵を撃攘せしめたり。茲に於て鞍部の敵兵全く退却す。然れども敵は西南稜線に停止し老座山南方高地の敵亦之に増加する模様ありしを以て、更に第五中隊を乏に増加す。

午前3時左翼隊長より命令在り、曰く、其の聯隊ハ砲兵援助ニ依リ大白山東方高地並びに老座山ノ敵ヲ攻撃スヘシト。然れども聯隊長は現状に於て、老座山の攻撃は至難なりとし、先づ大白山東方高地の敵を圧倒し、運動を以て老座山の敵を退却せしめんと決し、第1・第3大隊に大白山東方高地の攻撃を命じ、第二大隊に老座山占領陣地を固守すべく命令せり。

午後五時砲兵は大白山の敵に砲撃を開始す。茲に於て第1大隊は午後6時大白山東北方約千二百米突の高地に、第三大隊は午後6時40分標高195高地東方斜面に展開し、共に大白山の敵に攻撃前進を開始せしも、断崖絶壁殆ど前進し得ざるのみならず、全面二三百米突の敵壘は最も強固にして、砲兵の威力を發揚せし後にあらざれば到底攻撃成功の見込なきを以て、聯隊長は昼間攻撃を中止す。午後9時40分第一大隊長は第二中隊に命じ、大白山の敵壘に向ひ夜間強襲偵察をなさしめしも、月光は偵察隊の運動を暴露せしめ、遂に無効に帰せしめたり。是を以て大白山攻撃隊は展開の俛夜を徹す。

老座山占領陣地の守備隊たる第1大隊は、午後9時以後十数回敵の回復攻撃に遭遇し、喊声殆んど絶ゆることなかりしも、将士死傷を顧みず共力一致苦戦奮闘、漸く之を維持するを得たり。

27日 午前二時、左翼隊長の命令に曰く、歩兵第十二聯隊ハ午前四時運動ヲ開始シ、大白山南力約千五百米突ノ高地ニ亘ル線ニ前進スヘシ。歩兵第43聯隊ノ一部ヲ以テ貴隊ト歩兵第22聯隊トノ中間ニ増加スト。此命令に依り第1・第3大隊を小龍王脣東溝附近に集合せし

め、我砲兵を持ちしも、敵砲火のみ熾盛にして、我は毫も応射する色なかりしを以て、止むなく第2大隊の発展を待つに至る。

第二大隊は、第7・第5・第10中隊をして占領陣地を固守せしめ、加茂大尉は第六・第八中隊を指揮して竊に敵の側背に出て老座山西南方約二千五百米突の海岸望楼より東北に征長せる高地線を占領せしも、龍王塘東方の優勢なる敵は忽ち出て我を迎へ、激戦数時に亘り、而も我は尚ほ目的を達する能はず。此時に当り敵の砲艦一隻・駆逐艇四隻海岸望楼西南海岸近距離に現れ我左側背より重砲及機関砲を発射し、龍王塘東方の敵と我を挟撃し、殊に1隻の駆逐艇の如きは陸戦隊を上陸せしめんとし短艇数隻、已に岸に達し、一部は上陸を開始せり。茲に於て前面の敵を捨て、死傷を顧みず全力を尽して陸戦隊の上陸妨碍に努めしかば、敵は上陸決行の企図を放棄し、午後1時我艦隊の水平線に現はると共に、旅順方面に退却せり。

午後4時半、我砲火は大白山一帯高地に集注せられ、稍々其効果を見るに至りしを以て、聯隊長は第一大隊をして小龍王塘東溝東方高地より其の共西方高地の敵を、第3大隊をして東溝三叉路附近より其の西南高地の敵を攻撃せしむ。

第1・第3大隊は命に応じ、各2中隊を第一線に展開し、決戦準備射撃をなせしも、正面及び左右両側より猛烈なる十字火を蒙り瞬時にして多大の損害を蒙るにいたれり。第3大隊長は此の攻撃の不利なることを認知し聯隊長に意見具申し午後6時30分より老座山の敵を側背より衝く目的を以て攻撃点を老座山に変換し攻撃前進に移りしもこれ又十字火を蒙り午後9時30分漸く老座山中腹に達するを得たり。

午後十時十分右翼歩兵第43聯隊方面に突喊の声を聞くや、第一大隊長は之に和し、大白山最高地南方稜線の敵陣地に向て夜襲を決行せんとし、第1・第3中隊を突撃隊とし、猛烈に突入せしむ。突撃隊は勇戦敢闘、漸次敵壘を奪取しつゝ南方に突貫し、午後10時40分海岸新道に至る間を占領するを得たり。敵は終夜恢復攻撃に余念なかりしも、よく之を撃攘し、是に始めて大白山東方高地を占領するを得たり。

28日 天明に及び大白山・老座山の主力は河を渡り退却を開始せり。第一大隊は猛烈に之に追撃射撃を加へ、敵に多大の損害を与へ、第2・第3大隊も亦老座山より其南方に亘る陣地を占領するを得たり。敵兵全く大小孤山方向に退却の後、聯隊は小龍平溝東附近に露營し、専ら給養に努む。

- 29日 午前4時30分小龍王塘東溝を出発し、師団集合地なる大石洞東北方三叉路に集合し、同11時20分同地を出発し、午後1時獵樹溝に於て露營す。
- 30日 第1・第3大隊は左翼隊の予備隊となり、山川柳に前進し、第二大隊は師団の予備隊となり林家庄子に位置し、共に露營す。
- 8月2日 聯隊は右翼地区隊命令に基き、月の上るを待ち山川柳を出発、大瀧溝に向て前進し、久野（廉）大隊（第三中隊欠）を右翼、志岐（守治）大隊（第九中隊欠）を左翼第一線とし、大瀧溝南方二千米突縦谷の両側高地線に拠り、以て大小孤山の敵に対して警戒せしめ、聯隊本部及第3・第9中隊は第1大隊の北方谷地に露營す。
- 3日 大孤山上の敵砲兵は、我が右翼第一線たる第1大隊方面に間断なく砲弾を発射し、我土工作業の妨害をなせり。其の弾数実に361発に達す。
- 4日 聯隊は第一線工事を益々強固ならしめんとし、昼夜を待たず工事に従事す。敵は昼間大小孤山より数百の砲弾を集注し、夜間は旅順東部の諸砲台より探照燈を以て照明せり。故に我が作業は著しき防害を蒙りたり。
- 7日 師団の攻囲線を大小孤山の線に前進せんとするや、神尾少将の指揮する左翼地区隊は、大孤山頂より小孤山を経て海岸に亘る間を占領せんとし、我聯隊に大孤山の占領を命ず。午後4時砲撃開始せらるゝや、聯隊は直に出発準備をなし、左翼隊たる歩兵第43聯隊の運動と相連繫して、午後6時攻撃運動を開始す。
- 乃ち第三大隊を第一線とし、大孤山東麓に第一大隊（第三中隊欠）を第二線とし、大孤山東北麓に向て攻撃前進せしめ、第三中隊を予備隊とし中央後を行進せしむ。
- 聯隊の運動を開始するや、強雨篠を乱すが如く降り、須臾にして暗黒咫尺を弁ぜず。剩へ大孤山北麓の河川は俄に増水し、殆んど胸を湿すに至る。午後十時半敵弾を冒して悉く河を渡り、大孤山東北麓に集合するや、聯隊長は大孤山東北部の高地に突撃することに決す。第9
- 第11・第2中隊第一線突撃隊となり、大孤山頂東南端より北方に

下  
れる稜線上の敵散兵壕に突貫して之を占領し、続て最高地に突撃を  
決  
行す。抑も大孤山の地形たるや奇巖突兀として露出し、剩へ降雨の  
為  
め滑転甚だしく、多兵を用ふるの余地なし。数回の突撃に於て将士  
勇  
を鼓して墨々肉迫するも、猛烈なる霰弾は立所ろに多大の死傷者を  
生  
ぜしめ、沼田・森本両大尉等は終に茲に死す。亦た如何ともする能  
は  
ずして夜を徹す。

8日 正午12時敵の艦隊「ノーウキク」以下14隻、小孤山東南沖海岸近く現  
はれ我を砲撃す。第三大隊は斜面を利用して僅に其の砲撃を免れた  
れば、其占領位置を保持するを得たりしも、第一大隊は全く敵艦に  
暴露せし為め、敵艦の熾盛なる砲撃を蒙り、肉飛び血潮るの悲惨な  
る光景は、時々刻々其歩を進め到底現状を維持する能はざるに至り、  
占領地を棄て大孤山東北高地脚に退却するの止むを得ざるに至り  
たり。旅団長は攻撃再興を命じ、午後4時半より砲撃を開始せしむ。砲  
声殷々硝煙大孤山頂を蔽ふ。砲撃2時間半の後、午後7時聯隊は第九  
・第十一中隊を突撃第一梯隊とし田崎大尉之を指揮し、第十・第十  
二中隊は第二梯隊となり志岐少佐之を指揮し、第一大隊は第三梯隊  
となり突撃に移る。第一梯隊は大孤山東部高地の砲兵海端に呐喊し、  
奮闘之を占領し、敵兵400を潰走せしむるや、小孤山の敵は猛烈に我  
を側射し、是に於て多大の死傷者を生ず。

此の時に当り敵の一部は、尚ほ大孤山西部の高地に拠りて頑強に抵  
抗す。志岐少佐は部下を激励して再び突撃す。筑土大尉・北原中尉  
・市田中尉・三善少尉等奮進肉薄接戦して終に之を占領せり。然れ  
ども敵は尚ほ之を恢復せんと岩角に遮蔽しつつ前進し、小銃を使用  
する能はざる迄咫尺し、彼我石礫を投ずるに至り、敵は益々増加し、  
危機一髪の時当り、本城中尉部下を率ひて来援し、敵を駆逐する  
を得たり。又第一大隊は第三大隊に続て前進し、東部高地の占領を  
確実にし、敵襲を撃退せり。茲に於て全く大孤山の占領を終れり。  
敵の死傷者は五百を降らず。重・野砲八門、小銃弾薬其他器具材料  
等多数の鹵獲品ありたり。

午後9時10分敵兵敗退後瞬時にして敵の諸砲台より猛烈なる砲撃を蒙

れり。其砲声の猛烈なる破裂の景況の凄じ言語に絶へたり。蓋し全戦役を通じて如斯砲撃を蒙りしは他に比を見ざる所なり。然りと雖も是が為めの損害極めて僅少なりしは、天祐と謂ふべきなり。

此戦闘に於て聯隊は軍司令官乃木大将より左の感状を拝授せり。

#### 感状

#### 歩兵第十二聯隊

明治三十七年八月七日ヨリ九日二亘り大孤山ノ敵ヲ攻撃スルヤ猛火ヲ冒シ嶮崖ヲ攀チ多大ノ損害ヲ蒙ルモ更ニ屈セス遂ニ同山ヲ占領セリ爾來敵艦隊ノ猛射ニ耐ヘ数回ノ逆襲ヲ撃攘シ敵ヲシテ旅順要塞内ニ退却セシム其ノ功績顯著ナリトス

明治三十七年九月一日

第三軍司令官陸軍大将正三位功三級男爵 乃木希典

- 8月9日 午後零時三十分敵兵約五百名、我右翼に來襲す。第三大隊は歩兵第二十二聯隊と共力して敵の先頭部隊五十余名に向て猛烈なる射撃を加へ、之を全滅せり。敵は攻撃を断念して退却す。我軍死傷34名。午後1時旅団の予備隊たりし荒牧中隊、聯隊長の手裡下に復歸す。同時小孤山は敵の逆襲を受け苦戦す。佐野中隊は側面より此の戦闘に参与し、爾後大孤山東南崛起せる稜線を占領し、当聯隊と歩兵第42聯隊との連絡を確実にせり。
- 10日 東鷄冠山以東の諸砲台より間断なく砲撃を蒙る。此の日第三大隊の大行李は山川柳に、第二大隊の大行李は太湾溝に召致せり。
- 11日 第一次補充員として歩兵大尉河野諭義・少尉三木恵吉・同中塚条之助・同河崎和一・同真木弥吉、下士以下三百名到着せり。爾後十八日迄聯隊は大孤山の守備に任ず。
- 18日 鷹司侍従武官及田内東宮武官來團し、兩陛下の詔勅及皇太子殿下の令旨を傳達せらる。

#### 兩陛下ノ御詞

第三軍ハ南山ノ役後数回ノ戦闘ニ従事シ將校以下一同困苦欠乏ニ堪ヘ連戦連勝ノ報上聞ニ達シ兩陛下ニ於カセラレ御満足ニ思召サレ目下炎暑ノ候軍一同健康ヲ注意セヨ

#### 皇太子殿下ノ令旨

第三軍ハ天險ニ抛レル敵ニ對シ連戦連勝之ヲ其ノ本防禦線内ニ圧迫シ攻城戦期ヲ進捗セシメタルハ閣下始メ將校下士卒忠勇ノ致ス所皇太子殿下深ク御満足ニ思召サルト同時ニ死傷者ニ對シテハ厚ク御

哀憐アラセラル時下炎暑ノ候各自自愛自重能ク健康ヲ保全シ以テ終局ノ奏効ヲ望マセ賜フ。

軍は明19日より旅順要塞総攻撃を開始することに決し、各方面共に漸次攻囲線を前進せしむ。聯隊も亦山中少将の指揮下に属し、午後9時20分攻囲線を揚家溝南方高地より大孤山に亘る間に移転せり。掲ち第二・

第四中隊に機関砲一分隊を附し、平田大尉をして指揮せしめ、揚家溝南方高地を占領せしめ、第三大隊をして揚家溝南方約三百米突の三叉路より其東南大孤山の稜線に亘る間を占領せしめ、第二大隊及工兵小隊は予備隊とし唐家屯西南高地脚に位置せしむ。

竹内大尉の指揮する第一大隊本部及第一・第三中隊は右翼隊の予備として大孤山西北麓に位置せり。

8月19日 午前六時より我全攻城砲兵は砲撃を開始せり。敵の要塞砲応射すと雖も我に比し最も緩慢なり。聯隊は高地稜線に監視哨を配置し、部隊は

悉く斜面に依て隠蔽す。

20日 軍の攻城砲兵は猛烈に砲撃すること前日と異なることなし。午後8時30

分前日の命令に依り聯隊は突撃準備の為め南部王家屯南方高地の線に前進す。

21日 前進地区に於ける障碍物破却の為め派遣せし第七中隊及工兵小隊は、堡壘及散兵壕よりする猛火を冒し、東鷄冠山東南砲台の鉄条網附近にありし監視哨を撃退し、幅六米突の突撃路三個所を開通して、午前五時無事帰還せり。此の時に当り我が右翼に連繫して東鷄冠山に突撃すべき任務を有する歩兵第二十二聯隊は、未だ突撃路を開通する能はざれば、突貫実行の挙に至らず。然れども師団の最右翼の攻撃は進捗し、北砲台突撃隊たる歩兵第四十四聯隊は既に北砲台を超越して勇猛に奮闘しつつあり。之を援助する為め、聯隊は東南砲台に突撃せんとせしも、如何せん右翼に連なる聯隊の毫も活動せざるに於ては、徒に万卒を死地に投ずるのみ。聯隊長は大に感じ且つ自ら決する所あり。以て突撃を中止し右翼の突撃を待ち遂に日没に至る。

午後7時30分右翼地区隊命令に依り第二大隊を第一突撃隊とし、第三大隊を第二突撃隊とし、第二・第四中隊を予備隊として突撃を執行す。仍て第二大隊は、第七中隊の一部に工兵を附し、突撃路の開通に

任ぜしめ、残余を以て突撃縦隊を編成し、鉄条網を超越して東南砲台  
下層散兵壕に突入せり。敵火は猛列を極め死傷算なく、其成功期すべ  
からざるを見るや、第三大隊の二中隊を増加せり。然れども東鷄冠山  
突撃隊は尚ほ沈黙を守り突撃の模様なく我突撃隊は、刻一刻悲惨の情  
況に陥るのみ。此に於てか聯隊長は縦令我が聯隊を以て東南砲台の一  
部を能く奪取するを得たりとするも、寡弱なる兵力を以て之を維持す  
ることの困難なる、火を賭るより尚ほ明かなれば、第三大隊長志岐少  
佐の意見を容れ、責を負ふて退却に決し、予備隊より收容隊を出し、  
死傷者の收容に任ぜしめ、22日午前五時徐に部隊を纏めて南部王家屯  
南方陣地に帰還せり。

22日 右翼地区隊の予備隊たりし竹内大尉（貫一郎）の指揮する第一大隊（第二・第四中隊欠）は、歩兵第四十四聯隊長石原大佐の指揮下に入り、午後一時東鷄冠山北砲台に突撃せしも、敵の猛烈なる銃砲火を蒙り、第3中隊長西川大尉（房吉）戦死し、下士卒の死傷多く、且つ歩兵第四十四聯隊の第三大隊も共に多大の損害を蒙りし為め、突撃を中止せり。午後七時聯隊（第一大隊欠）は右翼地区隊となり、五家房より大孤山西南麓に亘る線を守備警戒す。第一大隊は師団予備隊となり揚家溝谷地に位置す。

8月23日 敵情変化なく第一大隊は師団命令に拠り位置を姜家屯南方に転ず。

24日 師団の主力を以て盤飯山より支鷄冠山方向に突撃することに決し、歩兵第四十四聯隊を以て望台に、歩兵第二十二聯隊を以て盤龍山東旧砲台の東南新砲台に向ひ突撃せしむ。当聯隊第一大隊（第一二中隊欠）も亦望台突撃に参加せしも、大隊長代理竹内貫一郎先づ戦死し、平田大尉次で負傷し、瞬時にして死傷者相踵ぎ、遂に望台占領も意の如くならず、午後七時二十分師団命令を以て其の突撃を中止せしを以て、夜暗を利用して予備隊の位置に帰還せり。

歩兵第二十二旅団副官	歩兵中尉	北原	信次
歩兵第十二聯隊大隊副官	同	堀川	忠又

	同	同	市田	太郎
--	---	---	----	----

右各本月二十日附補職。

歩兵少佐児玉象二郎、歩兵第十二聯隊大隊長被仰付、本日着隊、第一大隊附を命ぜらる。

25日 師団命令に依り、聯隊は右翼地区隊となり、第三大隊をして五家房東北方に於て第九師団と連絡し、姜家屯南方約三百米突の三叉路に至る

高地線を占領せしめ、第一大隊（第一中隊欠）をして其の左翼に連繋

して南部王家屯南方高地に亘る線を占領せしめ、第二大隊をして揚家

溝南方高地より大孤山西南斜面に亘る線を占領せしめ、予備隊たる第

一中隊を北部王家屯南方に位置せしめ以て攻囲を維持せり。

28日 陸軍歩兵少佐陶山操、歩兵第十二聯隊大隊長被仰付着任す。

29日 師団命令に依り、第二大隊を前進せしめ、第一大隊の左翼に連絡し大孤山前南方高地の線を占領せしむ。

9月1日 軍司令官より訓令を受く。其要旨は、軍は爾後正攻法を以て旅順要塞を攻陥するにあり。

補充兵として歩兵大尉矢上正治、少尉岡照彦、見習士官鎌田英太郎

以

下四百九十七名到着す。

2日 師団命令に依り、聯隊は山中少将の指揮する右翼地区隊の左地区隊となり、南部王家屯西方谷地の西側より大孤山前西南方高地に亘る線に堅固なる工事をなし、以て東鷄冠山砲台に対し、正攻法の端緒を啓けり。

9日	歩兵第二十二聯隊	歩兵大尉	田崎	又次
	同	同 中尉	森田	格
	同	同 中尉	大隈	一蔵
	同第四十四聯隊	同 中尉	本城	剛三郎
	同	同 中尉	勝浦	益衛

右頭書聯隊に仮配属を命ぜらる。

10日 歩兵第十旅団に仮配属なしありし上等兵以下三百十名、聯隊に復歸す

12日	陸軍歩兵特務曹長	太田	千里
	同	吉見	馬三
	同	西山	忠次郎

右八月十三日附任歩兵少尉

陸軍歩兵特務曹長	真井 絢吉
同	内藤 九郎
同	藤岡 浅太郎

右八月十三日附任歩兵少尉

本日師団命令により軍隊区分変更せられ、聯隊は中央地区隊となりしも、其の担任すべき攻囲線異なることなし。

- 9月19日 軍は第一線師団を以て二〇三高地及水師營南方高地の敵壘を、第九師団を以て龍眼北方高地の角面堡を攻撃することに決し、師団は東鷄冠山砲台以東諸砲台牽制の任に当る。聯隊は第二・第三大隊の一部を既成陣地に就かしめ、其残余は南部王家屯谷地に集合を命じ、第一大隊を予備隊として、揚家溝谷地に位置せしめ第一線部隊をして小銃火を以て東鷄冠山同東南砲台及瘤山の敵を牽制せしむ。
- 20日 第九師団は龍眼北方高地を確実に占領せとの通報に接す。聯隊は師団命令に基き依然牽制の任に当る。午後11時第一師団は標高二〇三高地を占領せりとの報に接し、当方面に敵の出撃を顧慮し、聯隊は数多の潜伏斥候・将校斥候を派遣して警戒せしも、敵状変化なくして翌日に至る。
- 21日 師団命令に依り、牽制射撃を止め旧姿勢に移る。
- 25日 聯隊長新山大佐は歩兵第二十二旅団長代理を命ぜられしを以て、第二大隊長陶山少佐聯隊長代理を命ぜらる。〔神尾旅団長、遼東守備軍參謀長補任のため、次の前田旅団長着任まで〕
- 対壕作業九月一日、軍の訓令に基き正攻法を以て旅順要塞を攻陥する
- ことに決してより、以来聯隊は東鷄冠山砲台に向て対壕作業を実施せ
- り。実に九〔十か〕月二十九日に至る二ヶ月間の竣工したる歩兵陣地
- は、第一より第十二及び更に敵砲台下僅に五十米突の所に達する直進
- 攻路を構成せり。最初に於ける対壕作業の進捗は軍中他に比を見ず。其名噴々たり。会々第四歩兵陣地構築に当り岩石層々たるに遭遇し
- 甚
- だしき困難を極めたりと雖も将校下士卒昼夜を論ぜず、敵弾の損害を
- 顧みず刻苦奮勵遂に之を完成し、第五・第六歩兵陣地及之に通ずる

攻  
不  
第  
困  
ず  
依

略の構築の際の如き敵は猛烈なる妨害を加へ、昼夜死傷者相踵ぐも  
撓不屈短日月間に完成の実を挙げしめ、殊に十月一日夜鉄条網下に  
第八歩兵陣地構築の如き、敵は出撃を試み、死傷者続出し、其作業の  
難なる言語に絶するものありき。然れども決死作業手は撓まず屈せず  
之を竣工するを得たり。現時の情況は、左に挙ぐ土屋中将の賞詞に  
依りて、之を想像するに足る。

難

F 堡壘二対スル第八歩兵陣地（其方面ニ於テ最モ危険ニシテ最モ困難  
ナル工事ナリトス然ルニ各中隊ノ撰抜歩兵及工兵ハ昨一日夜決然起  
テ該工事ヲ実施シ頗ル多大ノ死傷者ヲ出セルニ拘ラス不撓不屈ノ精  
神ヲ以テ遂ニ能ク工事ヲ継続セシノミナラス尚将来該陣地ハ他ノ補  
助ヲ受ケス当夜ノ作業手ノミヲ以テ完成スルコトヲ期スルニ至リテ  
ハ真ニ嘆賞ニ堪ヘサルナリ本職ハ茲ニ其勇氣ト熱誠ニ対シ聊力酒桶  
ヲ贈テ以テ其勞ヲ慰ス

る  
の  
し、

明治三十七年十月二日 第十一師団長 土屋 光春  
第八歩兵陣地の完成と共に、其左に第九・第十歩兵陣地を構成せり。  
何れも敵の堡壘を去る僅に四五十米突に過ぎず。工事の困難想像す  
るに余ありと謂ふべし。爾後苦心惨憺、数多の方法手段を講じ、莫大  
の犠牲を顧みず、鉄条網破壊を断行し、更に進で直進攻路を構成完了  
し、  
以て第二回旅順要塞総攻撃を準備せり。

30日

砲  
揮

第二回旅順要塞総攻撃  
軍は本日を期して総攻撃を実施するや、聯隊は本攻撃隊となり瘤山  
砲台及東鷄冠山砲台を強襲を以て奪取せんことに決し、陶山少佐の指  
揮する第五・第六中隊・工兵半小隊・迫撃砲一分隊を瘤山突撃隊とし、  
第八歩兵陣地に位置せしめ、児玉少佐の指揮する第一大隊・工兵第

一  
十  
隊  
攻  
る  
1  
第  
及  
之  
て

中隊、第一小隊欠) 迫撃砲二分隊を東鷄冠山突撃隊とし、第九・第十歩兵陣地及攻路に位置せしめ、第三大隊・機関砲第六小隊を射撃部隊とし坂の下に位置せしめ、以て午後一時の来るを待つ。今朝来、軍攻城砲兵の効果著しく敵壘上に土囊の飛散、人体の飛揚歴々として見るべく、壯絶快絶例ふるに物なく、将士の意気大に振るふ。午後1時1分、瘤山突撃隊は第八歩兵陣地より、東鷄冠山砲台突撃隊は第九・第十歩兵陣地より、共に躍出し胸墻を蹶て猛進す。瘤山突撃隊は工兵及第五中隊を第一線とし、鉄条網を破壊しつつ前進し、奮戦格闘終に之を占領し、三面よりする銃砲火下に在て工事に従事し、万難を排して占領陣地を確実に保持することを努め、第5中隊長荒牧大尉(光造)、工兵特務曹長向井扱二等相前後して戦死せしと雖も、生存将士協力一致遂に占領堡壘を維持するを得たり。時に午後一時十五分なりき。其偉勲に因り軍司令官より左の感状を授与せらる。

感 状

歩兵第十二聯隊第五中隊

明治三十七年十月三十日旅順要塞瘤山堡壘攻撃二任スルヤ勇進奮闘頑強ノ敵兵ヲ駆逐シ同砲壘ヲ略取シタルノミナラス克ク両側砲台ヨリ瞰射スル猛烈ナル砲火ニ耐ヘ敵兵ノ逆襲ヲ撃退シ急速工事ヲ施シテ堡壘ノ占領ヲ確實ナラシメタリ其動作勇敢其功績顕著ナリトス

明治三十七年十一月一日

第三軍司令官陸軍大将正三位卿勲一等功三級 男爵乃木希典

て

第一・第三中隊は東鷄冠山砲台突撃隊として、砲台の東西両側に向けて突入す。両中隊は衝天の勢を以て先ず東鷄冠山中腹散兵壕を蹂躪し、敵を鏖殺し勢に乗じて一気砲台内に闖入せんとし、其先頭小隊の砲

台  
に達するや、敵は支那旧二重圀廓より猛烈に小銃火を以て側射し、  
両  
中隊の過半を殺傷し、我が後続部隊の未だ砲台に達せざるに乘じ逆  
襲  
に転ぜり。此時に当り少尉森良太・吉村良等左右に侍する僅々三十  
余  
名の兵を叱咤激励して敵と格闘し、爆薬石礫を投じて死守せしむ。  
然  
れども衆寡素より敵せず、悉く枕を並て死するに至れり。此に於て  
か  
一旦占領せし砲台も再び之を敵手に委するの止むを得ざるに至りたり。  
突撃隊長児玉少佐は第二・第四中隊に前進を命ぜしも、側射は  
益々  
激烈にして前進途中悉く死傷し、砲台占領隊を増援し能はざるのみ  
な  
らず、中腹散兵壕の両端より敵爆薬隊の逆襲を蒙り、壕内も亦た格  
闘  
戦を開始するに至るや、将校以下の死傷頻々続発し、隊長左右を顧  
み  
れば健在するもの数名に過ぎず。情況上述の如くなるを以て隊長は  
無  
念の涙を呑で大隊旗を直進攻路頭にたてしめ、生存者を收容せり。  
来  
り集まるもの僅に十数名、時に午後一時三十分なりき。  
本日の攻撃に於て瘤山堡壘は之を確実に占領するを得たりしと雖も、  
東鷄冠山の占領は五百余名の犠牲を堵して尚ほ之を為すこと能はざ  
りしは、千載の遺憾と謂ふべし。然りと雖も、将校以下の勇悍壮烈  
なる動作は鬼神も慟哭すべく、遺烈は長く大地と共に尽きざるべし。  
午後三時以後は、第二大隊をして瘤山堡壘及第八・第六陣地を、第  
三  
大隊をして第九・第十・第七陣地を守備せしめ、第一大隊の生存者  
を  
以て予備隊とし第四陣地に位置せしめ、敵の出撃に備へしめ以て夜  
を  
徹す。

11月1日 本攻撃隊たる聯隊は攻撃姿勢を解き、更に攻路を進めんとし、志岐少佐を対壕委員長とし、鋭意東鷄冠山中腹散兵壕に逼迫作業を実施せし

む。

爾後特別作業班なるものを編成し直進攻略を延長して更に突撃陣地を構築して、尚は坑道作業に及び、敵の半永久陣地相距たる僅かに十数米突、敵の囁話と雖も能く之を聞知し得るに至れり。故に従前の銃砲弾を以てせし妨害は変じて爆薬或は迫撃砲となり、昼夜を論ぜず我陣地内に投射し、其数毎日百以上に達し、作業手の死傷者目を追って多く、僅かに二旬ならずして特別作業手の全員は、殆んど最初の選手と其人を異にするに至りたり。又以て作業の如何に困難なりしかを想像するに足らん。

23日 逼迫作業の進捗とともに第3回旅順要塞総攻撃計画案も将に成らんとし、帥団に於ては此の攻撃前、東鷄山中腹散兵壕を奪略するの必要を

認めたるものゝ如く、23日午後五時30分を期し、東鷄冠山中腹散兵壕を考略すべき命令下れり。因って第三大隊・工兵第一中隊を突撃隊とし、第二大隊及び機関砲第六小隊（第六分隊欠）を右翼射撃部隊とし第1大隊及び機関砲一分隊を中央射撃部隊とし、歩兵第43聯隊第三大隊を左翼射撃部隊とし歩兵第43聯隊第五・第八中隊を予備隊とし、午後五時迄に突撃隊は第九陣地附近に於いて突撃準備の隊形を収り、右翼射撃部隊は瘤山第六陣地に、中央射撃部隊は第四陣地に、左翼射撃部隊は東鷄冠山東南砲台に対する第六対壕附近に、予備隊は南部王家屯幕營地に位置して突撃の時機を待つ。突撃部隊は更に小銃隊爆薬隊、援隊、鉄板隊及び鉄板台運搬隊に区

分

し後方準備隊として第十二中隊は土囊運搬隊として第十一中隊を備へ、午後六時十五分迫撃砲の斉射を合図とし、小銃隊は三善少尉（弥寿男）之を指揮し東鷄冠山中腹散兵壕に突入し敵を突破す。爆薬隊之に次ぎ爆薬戦闘の後、漸次敵を東西両側に圧迫し散兵壕は我有に期す。此に於てか鉄板隊・土囊運搬隊等続行し敵弾雨飛の下決然として各其の任務に奔走せり。此の時にあたり諸砲台は我が各歩兵陣地に銃砲弾を集注し、両軍の銃砲声猛烈を極む。午後七時十分日没し月輝くと同時占領散兵壕内は爆薬の為め火災を起せしが如く火焰天を焦がし、情況全く不明となれり。

会々小銃隊長三善少尉重傷を負い帰り来て曰く。敵の増加隊は爆薬

を

投擲しつつ死を決して前進し来たり、我勇敢なる兵卒は格闘以て之

に

当りしも悲哉瞬時にして過半を失ひ、今や生存せるもの極めて少な

く、

爆薬隊員及増加隊員等目下必死格闘中にして敵壕内の混雑悲惨の状  
態言語に絶せりと。由て志岐少佐は筑土中隊のやむを得ざるに至り、  
敵散兵壕全線より発射する猛火全く筑土中隊の応援を無効に帰せし  
めたり。

聯隊長は突撃効を奏せざりしを以て突撃隊長に隊伍を整頓し速に恢  
復攻撃をなすべきを命ぜり。時に午後九時なりき。

11月24日

午前1時10分。漸く隊伍整頓せしを以て志岐少佐は第10・第12中隊

を突撃部隊とし、各射撃部隊の掩護射撃の下に、第九・第10歩兵陣  
地

より突入せしむ。感慨胸に満ちたる両中隊は決然起て敵陣に突入せ  
し

も、白昼と異ならざる月光は敵弾の威力を増大し、其胸墻にだに到  
達せしめず。爾後数次の突撃を続行せしも、皆同一の運命の下に葬  
られたり。

午後3時、突撃隊の状況上述の如くなれば、準備周到なる敵に対し一  
の掩護砲撃もなく、少数の兵を幾回注入するも、到底奏功の見込み  
な

く、徒に不成功の犠牲を増加するのみなれば、聯隊長は他日の新突  
撃を待ち成功を期すべきの得策なることを意見具申し、突撃を中止  
し既成陣地に抛り突撃前の姿勢に復せしめたり。

26日

第3回旅順総攻撃

軍は本日午後1時を期し、第3回旅順要塞総攻撃を実施せり。蓋し時

局は旅順陥落を遅延するを許さざるに至りしを以てなり。

聯隊（第一大隊欠）は前日の朝受けたる師団命令に依り、東鷄冠山  
中

腹散兵壕を奪取する為め、第3大隊機関砲一門、迫撃砲七門及び工  
兵

第1中隊を突撃隊とし、第二大隊（第七中隊欠）・機関砲第六小隊（二  
門欠）を射撃隊とし・歩兵第43聯隊第十二中隊を助攻隊とし、第  
七

中隊及騎兵一分隊を予備とし正午十二時迄に攻撃準備を完了し、午後

一時の来るを待つ。

第1大隊（2中隊編成）は児玉少佐之を指揮し、中村少将（覚）の指

揮下に入る為め、26日未明揚家溝幕営地を出発し、水師營南方高地脚

に向て前進せり。

午後一時、東鷄冠山突撃隊は、中腹散兵壕に集注せし野山砲射撃の効果を認むるや、直に突撃陣地より突撃に移る。第十中隊長代理中尉橋本鹿之助・少尉古沢正義等部下を叱咤して敵散兵壕内に率先突入す。然れども敵は極めて頑強に抵抗し、我兵勇戦格闘せしも瞬時にして其過半を失ふに至る。是に於て第九中隊長大尉村田利行、部下中隊及機関砲一門を掲げ、直に之に増援し相協力して敵を左右に駆逐し、漸く散兵壕の一部を奪取するを得たり。然るに敵の爆薬隊は散兵壕左右の攻路より前進し来り。熾に爆薬を投擲し、剩へ困窮方面よりする小銃射撃は、我を縦射し死傷算なく、橋本中尉先づ重傷を負ひ、古沢少尉戦死し、次で漆原少尉重傷を蒙るに至り、午後一時二十分突撃隊は今や敵爆薬の為め潰乱に陥らんとせり。志岐少佐之を見、機逸すべからずとし、身を挺して敵散兵壕に向て前進せり。

第11中隊長大尉北原信次、第12中隊長筑土邦帯等相前後して突撃隊を援助せり。然れども敵の抵抗は愈々猛烈にして毫も退却の色なし。之に反し我は時々刻々死傷者を出し、志岐少佐・筑土大尉負傷し、次で村田大尉亦負傷し、北原大尉残兵を指揮督励して散兵壕の維持に努力せり。聯隊長は此の情況を見、第二大隊長陶山少佐に命じ第七・第八中隊を増加せしむ。第七・第八中隊は命に応じ散兵壕の西部に突入し、右翼より逆襲し来る敵を防止せり。此の時に方り我突撃隊の爆薬は既に尽き、我は敵の爆薬に対し単に銃剣を利用するより他に方法無きを以て、死傷は極度に達し、北原大尉戦死し、第七中隊少尉村尾源次、第十二中隊少尉吉村正行等亦負傷し、午後四時我健全者にして敵壕内に残留するものは、西山少尉の指揮する十数名と、第七・第八中隊の一部とのみ。而して聯隊長の許にあるものも亦2小隊に過ぎず、是を以て最早壕内を増援する余力なきに至り、事全く茲に窮せり。敵は勢に乗じて復も逆襲し来りしを以て、西山少尉等必死之を防止せしも、其効なく遂に此に戦死し、復た如

何ともする能はず。遂に退却の止むを得ざるに至りたり。

是に於て聯隊長は、攻撃の状況を詳に師団長に報告し、残兵僅に二百余名を区署して各陣地を守備せしめ、敵の出撃に対し死守すべきを命じて夜を徹せり。

児玉少佐の指揮する第一大隊は、軍の特別支隊に編入せられ、第七師団に続行して午後六時水師營東南眼鏡高地の北側附近を出発し水師營より旅順に通ずる本街道に沿って前進し松樹山新砲台を通過し、松樹山補備砲台に向て突入せり。時に午後八時三十分なりき。

第七師団の撰抜聯隊は多大の死傷者を生じ躊躇せし時に方り、大隊長は部下を激励して数回の突撃を執行せしが、爆薬の惨害と松樹山砲台より猛射する機関砲火と椅子山・案子山よりする重砲火の爲め、瞬時に多大の死傷者を出し、且つ夜暗他師団との混肴甚しく、隊伍の整頓困難にして突撃隊は一頓挫を来すに至りたり。然れども大隊長は不撓不屈突撃を再興せんとして自ら剣を抜て前進中遂に負傷し、少尉岡田浩・同上野豊之進・大尉阿部章五郎相繼で負傷するの悲境に陥り、少尉黒宮孝寿残兵を指揮して再び突撃せしも其効なく、軍の特別支隊も亦茲に於て全く其望を絶たざる可らざるに至れり。会々退却の命に接し黒宮少尉、大隊の健在者を纏めて午前三時水師營東南方に退却し、特別支隊の編成を解かるゝと同時、水師營を出発し二十七日午後九時四十分聯隊長の許に復歸せり。

本日の戦闘に於て、聯隊は東鷄冠山突撃隊及松樹山補備砲台突撃隊を合して其死傷者七百六十二名の多きに達し、而も其成效を見る能はざりしは遺憾極なしと雖も、敵に多大の損害を与へたるは毫も疑を容れざる所にして、旅順の陥落を速かならしめしに、与て力ありしものと謂はざるべからず。

28日 聯隊旗手を散兵壕掃除隊長とし、補助担架卒を指揮せしめ、死体武器弾薬器具の整理に従事せしめ、攻路の開通と共に坑道の延長及陣地の補修作業に着手せり。

12月2日 午後零時30分、第二大隊副官高嶋正俊は、杉山通訳を従へ赤十字旗を第九陣地攻路頭に建てたる後、敵散兵壕と我陣地との中間に進み、露の准士官と協議して死体若干を收容し、更に明日を期し全部死体の收容を約し、午後三時三十分我陣地に帰還せり。

3日 午前十一時、聯隊副官大尉林田一郎、中尉高嶋正俊、同高橋徳次郎等赤十字旗を建て、中央攻路より進出し、霖の将官（衛兵部長官）及其他の将校と協議し、大尉矢上正治、中尉水野真清、少尉吉村良、西山忠次郎、藤岡浅太郎、木村忠三、多田亮之進、古沢正義、森良

太、特務曹長以下二百七十九名の死体を收容せり。

18日 師団は午後二時を期し東鷄冠山北砲台の胸墻を爆破し、奇襲を以て同砲台を奪取せんとす。因て聯隊は瘤山堡壘以下の諸陣地に兵を配備し、東鷄冠山砲台に対し牽制射撃をなし、午後九時北砲台の占領と共に旧姿勢に復せり。

22日 補充員として大尉恰国二郎、中尉田中正躬、同三谷誠義、同桑原栄次郎、少尉舟橋茂、同岡見正信、特務曹長三名、見習士官一名、曹長以下二百七十九名到着す。

24日 陸軍歩兵少佐 赤沢 光雄  
右歩兵第十二聯隊大隊長被仰付。

陸軍歩兵少佐 赤沢 光雄  
右歩兵第十二聯隊第一大隊長を命ず。

26日 陸軍歩兵少佐 藤田 富世  
右歩兵第十二聯隊大隊長被仰付。

陸軍歩兵少佐 藤田 富世  
右歩兵第十二聯隊第三大隊長を命ず。

同二十八年

1月1日 鷄明暁を報じ瑞雲東天に輝くの時、陣頭の将士砲声殷々喊声潮の湧くが如き中に、新歳の賀辰を迎へたり。即ち前田地区隊は望台に突進し、第九師団の一部はH砲台に向ひ突進中なりき。仍て我地区隊は此の攻撃を援助し、為し得れば東鷄冠山砲台を奪取するの目的を以て、警急配備を取り、東鷄冠山砲台の敵と猛烈に射撃を交換せり。午後五時望台は確実に我有に帰し、其の後敵情変化なきを以て、師団命令に依り警急配備を解き旧姿勢に復せり。

午後七時歩兵大尉津田増次郎以下二百二十四名補充員として来着せり。

2日 午前零時四十分頃、敵は東鷄冠山砲台附近に於て一大爆破を行ひ、同時に煤葉を投じ銃砲弾を乱射したる後、俄然静粛に復歸し須臾に

して旧圉廓散兵壕掩蓋の猛烈に燃焼するを見たり。仍て聯隊長は直

に警急集合を命じ、第一・第二大隊をして東鷄冠山砲台に前進せし

め、第三大隊をして東鷄冠山東南砲台に前進せしむ。是より先き第

九陣地の警戒隊は敵の爆破と共に偵察斥候を東鷄冠山砲台に前進せしめ、敵兵既に退却せしことを確知せり。仍て第一・第二大隊に  
一氣砲台内に侵入して之を占領し、尚ほR砲台を占領し迅速に所要  
の工事をなし、以て占領を確実にせり。然るに東南砲台の敵は頑強  
にして益々増加し、第三大隊は突撃を試みしも、敵火は熾盛を極め  
遂に奏効せず。

午前2時30分、師団命令に依り、軍は天明と共に攻撃動作を中止  
することを達せらるゝや各大隊は占領砲台を確保するに足るべき  
工事を迅速に構成し、以て爾後の動作に備ふ。

午前七時、曙光東天に輝くや、東鷄冠山以西の防禦首線は、旭旗  
翻々

として中空に聳ゆ。茲に至り金城湯池の堅壘も亦全く我が有に歸  
せ

るを知る。攻囲半歳の久しきに亘り、幾万の生靈を犠牲とし、堅  
忍

持久終に此の好果を挙ぐ。将士の喜悦何を以てか之に例へん。其  
偉

功は青史と共に万世不朽なり。

午後二時三十分、軍使相会し、敵は我提出せる条件を納れ開城を  
約す。共規約左の如し。

#### 開城規約

第一条 旅順要塞及該港ニ在ル露国陸海軍々人及義勇兵並ニ官吏ハ総テ之ヲ俘虜トス、

第二条 旅順口ニ於ケル全堡壘・砲台・艦船艇・兵器・弾薬・馬匹、其他一切  
軍

用諸材料・官金・官有諸物件ハ現状ノ儘之ヲ日本軍ニ引渡スモノトス、

第三条 前二ヶ条ヲ承諾スルニ於テハ其担保トシテ来一月二日正午迄ニ椅子山  
小案子山大案子山及東南一帯ノ高地上ニ在ル堡壘砲台ノ守備ヲ撤シ日  
本軍ニ交付スヘシ、

第四条 露国陸海軍ニ於テ本現約調印当時ニ現存スル第三条件件ヲ破壊シ又ハ  
其他ノ方法ヲ以テ現状ヲ変更スルト認メタル時ハ談判ヲ中止シ日本軍  
ハ由ノ行動ヲ取ルヘシ、

第五條 在旅順口露国陸海軍官憲ハ旅順要塞配備図地雷水雷其他危険物ノ布設  
図及在旅順口陸海軍編成表陸海軍將校官職等級氏名簿軍隊艦船艇名簿  
及其乗組人員名簿普通人民ノ男女種職業員數表ヲ調製シ日本軍ニ交付  
スヘシ、

第六條 兵器（各人ノ携帯兵器ヲ含ム）彈藥軍用諸材料官金官有諸物件（私有  
物

ハ除ク）ハ悉ク之ヲ現在ノ位置ニ整置スヘシ其受授ノ方法ニ関シテハ  
日

露兩軍委員ニ於テ議定スルモノトス、

第七條 日本軍ハ露軍ノ勇敢ナル防禦ヲ名譽トスルニヨリ露国陸海軍ノ將校及  
所属官吏ニ帶劍ヲ許ス又前記ノ官吏及義勇兵ニシテ本戰役ノ終局ニ至  
ル迄武器ヲ執ラス如何ナル方法ニ於テモ日本軍ノ利益ニ反対スル行為  
ヲナササル事ヲ筆記宣誓スル者ハ本国ニ帰還スルコトヲ承諾ス陸海軍  
將校ニ各人ニ付一名宛ノ從卒ヲ隨行セシムルコトヲ許ス此從卒ハ特ニ  
宣誓開放ヲナス、

第八條 武装ヲ解除シタル陸海軍下士卒及義勇兵ハ其制服ヲ着用シ携帯天幕及  
私有物件ヲ携ヘ所属將校ノ指揮ヲ以テ日本軍ノ指定スル集合地ニ至ル  
ヘシ、

但シ其詳細ニ関シテハ日本軍ノ委員ニ於テ之ヲ指示ス、

第九條 旅順口ニ在ル露国陸海軍ノ衛生部及經理部員ハ病傷者及俘虜ノ救護ノ  
為メ日本軍衛生部員及經理部員指揮下ニ残留シテ引續キ勤務ニ服セシム  
ヘシ、

第十條 普通人民ノ処置市ノ行政會計事務及之ニ関スル書類ノ引継キ其他本規  
約執行ニ関スル細則ハ本規約附録ニ於イテ規定ス、

右付録ハ本規約ト同一ノ効力ヲ有ス、

第十一條本規約ハ日露兩軍ニ於テ各一通ヲ製シ調印ノ時ヨリ効力ヲ生  
ス、

赤十字ノ建物及土地ハ授受セズ（但シ此建物ハ僅少）

1月2日午後九時四十五分、此規約の調印を終る。

1月4日 師団の軍隊区分は本日を以て解除せらる。

第二大隊は白玉山砲台及其の附近の軍用建築守備の任を受け、旅順市街に出発  
す。

歩兵特務曹長 浦川 留作  
同 桜田 虎雄

右十二月二十八日附任陸軍歩兵少尉

5日 以後聯隊は新任務に服する為め教練を開始し、専ら下士卒の教育に

努め、以て北進を準備す。

9日 満州軍総司令官より左の勅語を伝達せらる。  
旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ第三軍及聯合艦隊ハ協同戮力久シク寒暑ヲ冒シ苦難ヲ凌キ勇戦奮闘克ク其鉄壘ヲ奪取シ堅艦ヲ殲滅シ敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシム朕深く汝将卒ノ克ク其ノ重任ヲ全フシ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

奉答

旅順要塞ノ攻略ニ対シ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣希典等感激ニ堪ヘス  
謹テ奉答ス

又本日山県参謀長より左の令旨を伝達せらる、  
皇太子殿下ヨリ左ノ令旨ヲ賜ル  
勇敢無比勇烈不撓ノ攻撃ニヨリテ旅順要塞ノ鉄壘ヲ破リ堅艦ヲ挫キ遂ニ守将ヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシメタル第三軍ノ偉大ナル奏効ヲ歎賞ス

奉答

旅順要塞ノ攻陥ニ対シ特ニ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ臣希典等感激ニ堪ヘス  
謹テ奉答ス

皇后陛下ヨリ左ノ令旨ヲ賜ハル

我力第三軍並ニ聯合艦隊ハ水陸協働旅順ヲ重圍スルコト数閱月激戦幾百回堅ヲ破リ鋭ヲ挫キ辛酸壯烈防備無ニノ天険ヲ冒シ頑抗不屈ノ勁敵ヲ殲シ遂ニ彼ヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシメタル趣皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ忠誠義勇克ク偉大ノ功勲ヲ奏シタルヲ深く御感賞アラセラル

奉答

旅順要塞ノ攻略ニ対シ優渥ナル令旨ヲ賜ハリ臣希典等恐懼ニ堪ヘス  
謹テ奉答ス

満州軍総司令官より左の感状を附与せらる、

感状

昨年六月下旬以来旅順要塞ノ敵ニ対シ長日月間堅忍不拔以テ堅ヲ破リ強ヲ挫キ遂ニ本年一月一日敵ヲシテ力屈シ開城ノ已ムヲ得サルニ至ラシメ茲ニ旅順攻城ノ目的ヲ達シ有終ノ光輝ヲ揚ク依テ感状ヲ附与ス

明治三十八年一月四日

満州軍総司令官侯爵 大山 巖

10日 聯隊は午前十時三十分揚家溝南方高地に東面して重複縦隊に集合す。  
聯

- 隊長謹で勅語を奉読し終て閱兵及分列式あり。
- 13日 入城式あり。師団命令に依り聯隊は軍旗中隊を編成し、午前八時小孤山後北方空地に集合し、旅順街道を前進し、旧市街に入り公園の傍に於て  
乃木司令官閣下に対し四列側面縦隊の分列をなし、午後五時幕営地に歸還す。此の日天朗に清人の戸々旭旗を翻し、数十旒の軍旗瑞陽に輝き、隊伍整々堂々として盛況を極む。  
本日第十一師団は第三軍の戦闘序列を脱し、新に鴨緑江軍戦闘序列に入り、韓国駐劄司令官の令下に属せらる。
- 14日 乃本大将祭主となり祭壇を水師營北方高地脚に設け、第三軍戦傷病死者の英靈を祭り、諸団体をして参拝せしむ。聯隊も亦之に参列す。午後一時式を終る。
- 15日 師団命令に日く、歩・騎各約一師団ノ敵ハ懐仁ヨリ平頂山ヲ經テ、高力營ニ亘ル線ニ在リ。我カ後備第一師団ハ此敵ニ対シ寬甸ヨリ靉陽辺門ヲ經テ賽馬集ニ亘ル線ヲ守備シ、其ノ一部ヲ以テ城廠ヲ占領シ、当師団ノ集中ヲ掩護ス。師団ハ不日出発、貔子窩・大孤山ヲ經テ行進シ、鳳凰城附近ニ集中セントス。諸隊ハ主トシテ行軍準備ヲ為シアルヘシト。仍て聯隊長を集め、北進準備に関する諸種の訓示を与へたり。
- 18日 陸軍大将川村景明、鴨緑江軍司令官に、陸軍少将内山小次郎同参謀長に任命せらる。
- 20日 師団は八梯団となり、旅次行軍を以て鳳凰城に向ひ行軍を起し、其の第一梯団は本日出発せり。而して聯隊は第一・第二大隊を聯隊長之を指揮し、二十八日出発すべき命に接せり。
- 27日 前日来の降雪は山野を埋め、其の深さ脚か没するに至れり。第七梯団たる第一・第二大隊は午前九時太瀧溝谷地に集合し、小平島に向て出発す。

謐樹溝に達せし頃、雪は累々として降り道路を弁ぜざるに至れり。然れども百難を排して太白山・老座山の陰を越へ、午後七時小平島に到着す。

28日 第七梯団は小平島を出発し、臭水屯に舎営す。第八梯団たる第三大隊は、旅順背面王家屯を出発し、小平島に舎営す。天候前日に異ならず。本日歩兵大尉大野虎六以下二百四十八名、輸卒九名、補充員として到着す。

29日 第七梯団は臭水屯に、第八梯団は小平島に滞在す。

30日 第七梯団は臭水屯を出発し、第一大隊は大房身に、聯隊本部及第二大隊は下関塞屯に舎営し、第八梯団は小平島を出発して臭水屯に舎営す。

31日 第七梯団は前夜の宿営地を出発し、後山口に向て出発す。該地は山間の寒村僻地、二大隊を宿営せしむ部落なきのみならず、村落露營をも許さず。仍て、第一大隊は北趙家屯附近に、第二大隊は楷家店附近に村落露營をなせり。両大隊宿営地の遠隔せる殆んど二里なりき。第八梯団は大房身に舎営す。

2月1日 第七梯団は午前八時宿営地を出発し、相異なる二道を取て劉家屯に向て前進し、午後三時三十分同地に着し、第一大隊は張家屯附近に、第二大隊は劉家屯に舎営せり。第八梯団は劉家屯に舎営す。

2日 第七梯団は午前八時二十分宿営地を出発し、第一大隊は高家屯附近に、第二大隊は窪子店附近に、聯隊本部は劉家店に至て舎営し、翌三日同地に滞在す。

4日 第七梯団は午前八時宿営地を出発し、午後三時半貔子窩に着し、同処に舎営す。時に陰曆正月二日の事とて、清人の歡迎実に盛にして舎営の景況亦た良好なり。第八梯団は高家屯に舎営す。

- 5日 第七梯団午前八時貔子窩を出発し、第二・第一大隊の順序を以て行進し、午後三時三十分宿營地に到着す。宿營地域左の如し、  
屯 聯隊本部及第一大隊、平房東橙南小仙両屯、第二大隊、金家哨・苗家屯
- 第八梯団は貔子窩に宿營す。
- 6日 第七梯団は午前八時宿營地を出発し、午後三時第一大隊は宋家派子郭家庄に、第二大隊は半拉山子に舍營せり。  
第八梯団は大房子に舍營す。
- 2月7日 第七梯団は午前八時宿營地を出発し、莊河に到て舍營し、翌八日同地に滞在す。舍營の景況良好なり。  
第八梯団は平房に舍營し、翌八日同地に滞在す。
- 9日 第七梯団は青堆子に舍營し、第八梯団は莊河に舍營す。
- 10日 第七梯団は青堆子を出発し、午後六時三十分大孤山に到着す。時に内野  
野 參謀より梯団は爾後休憩日を廢し可成兵卒の負担量を減じて鳳凰城に集合すべきの命を伝ふ。依て兵卒の背囊を悉く支那車両を以て運搬せしめたり。殆んど平時人員の二大隊に要する車両数四十台に上れり。運搬の困難なる知るべきなり。  
第八梯団は青堆子に舍營す。
- 11日 第七梯団は午前八時大孤山を出発し、午後四時第一大隊は刻家堡に、第  
第二大隊は小黃地に舍營し、第八梯団は大孤山に舍營せり。
- 12日 第七梯団は午前八時宿營地を出発せり。北風土砂を捲き行軍甚だ困難な  
りしも、行軍々紀嚴肅にして一名の落伍者をも生ぜず。午後四時二十分  
朱家堡子に到着し、同地に舍營せり。  
第八梯団は小店子附近に舍營す。
- 13日 第七梯団は午前八時宿營地を出発し、午後四時第一大隊は白旗に、第  
二大隊は石柱子に舍營し、第八梯団は朱家堡子に舍營せり。
- 14日 第七梯団は鳳凰城に向て前進し、午後五時舍營に就く。宿營一般に狭縮  
にして、其の宿營配布の如きも亦だ混雜を極めたり。  
第八梯団は白旗に舍營す。  
本日師団は更に其集中地を賽馬集に変更せし旨の命令に接したり。

- 2月15日 第七梯団は鳳凰城に滞在す。第八梯団又た当地に来着せり。
- 16日 第七梯団は午前鳳凰城を出発し、石頭城に到て舎營す。第八梯団は鳳凰城に滞在中、行李駄馬中啖咀病を発生せし為め、行李全部同地に残留を命ぜらるに至れり。
- 17日 第七梯団は石頭城を出発し、大凹溝に到て舎營す。宿舎極て狭縮にして宿營区域里余に及ぶ。第八梯団は鳳凰城を出発し、石頭城に於て舎營す。
- 18日 第七梯団は大凹溝を出発し、片嶺の嶮路を越へ、午後四時三十分賽馬集南方約一里半なる王家堡子附近に舎營せり。第八梯団は大凹溝に舎營す。
- 19日 午後零時二十分師団命令あり。日く、第七梯団ハ第二梯団トナリ、城廠二向テ前進スヘシト。仍て聯隊（第三大隊欠）は午前八時王家堡子を出発し、賽馬集を経て温道溝に至て舎營す。第三大隊は賽馬集に舎營し、翌二十日同地に滞在す。
- 20日 第二梯団たる第二大隊は、午前八時温道溝を出発し午後城廠に到着し、始めて梯団の編成を解除せられ、予備隊の姿勢に移れり。
- 21日 軍命令に依り聯隊本部と第二大隊及第十一・第十二中隊は軍の総予備に、第三大隊本部及第九・第十中隊は鍼廠の守備に、師団命令に依り第一大隊は師団予備隊に編入せらる。
- 22日 少佐赤沢光雄の率ゆる第一大隊は、師団命令に依り宿營地を城廠の西北方約一里なる李家堡子に移転せり。軍命令に依り、第八中隊は軍司令部の直接護衛に任せらる。
- 23日 軍は石灰高嶺附近より三道河を経て英守堡附近の敵を攻撃することに決し、本日を以て攻撃運動を開始せり。是れ抑も奉天会戦の序幕なりとす。聯隊（第一大隊及第三大隊本部と第九・第十中隊欠）は午前六時城廠を

出発し、泡子沿・南甸子を経て南台子に前進す。時に敵は大嶺方向に退

却せり。歩兵第十二聯隊ハ二道河子附近ニ村落露營ヲナスヘシとの軍命

令に接し、同地に宿營す。

第一大隊は二十二日午後十一時李家堡子を出発し、夜行軍を以て馬家城

子に至り、歩兵第二十二聯隊の後尾に続行して前進中、正午趙家甸子に

到着せし時、主力を以て前田少将の指揮下に入り、一部を以て伝家楼子

にある砲兵掩護に任ずべき師団命令に接す。仍て赤沢少佐は自ら第三・第四中隊を率ひて前田少将の指揮下に入り、中尉三谷議義をして第一・第二中隊を指揮せしめ、伝家楼子に趣かしむ。三谷砲兵掩護隊は午後六時任務を完して赤沢少佐の指揮下に復歸し、同夜鉢巻山南方千二百米突の高地脚に於て雪中に露營せり。

24日 第一大隊は第三中隊を旅団予備隊に充て、残余の三中隊を以て清河城南方鉢巻山の攻撃に着手す。

赤沢少佐は、歩兵第四十三聯隊第一大隊長渡辺少佐と協議し、相協力して鉢巻山の敵を攻撃することに決し、午前十時三谷中尉の指揮する第二中隊を右突撃隊として鉢巻山東北方高地に向はしめ、桑原中尉の指揮する第四中隊と歩兵第四十三聯隊芝少尉の指揮する第四中隊とを左突撃隊とし、当聯隊第一中隊を突撃続行隊とし、鉢巻山に向はしむ。鉢巻山の地形たる高地脈中の一小隆起部に過ぎざるも、実に敵の鎖鑰に

にして、繞らずに二重の樹幹鹿砦と二重の強硬断面の散兵壕を以てし、暗

部には地雷を敷設し防備至らざるなし。突撃隊は、突撃縦隊路の開設に殆んど工兵の全部を失ひ、其の突撃間も亦尠なからざる死傷者を出し、漸く下層散兵壕を奪取せしも、敵の決死隊は上層散兵壕に膠着して動かず。是に於て壮烈なる格闘戦を惹起し、勇戦奮闘終に之を占領するに至りたり。時に午後三時なりき。

右突撃隊も、左突撃隊に連携して突撃に転じ三谷中尉重傷を負いたるも、

特務曹長佐伯幸代で中隊を指揮し、同時に之を占領せり。

新山大佐の指揮する第二大隊及第十一・第十二中隊は、午前九時水洞

子

に集合し、第一線部隊の敵を撃攘するに及び趙家甸子に前進し、同地に

村落露營をなせり。

午後九時新山大佐は歩兵二大隊、砲兵第一大隊（二中隊欠）、騎兵・工兵

一中隊を率ひ、追撃隊長となり、小甸子・清河城を経て大嶺に向ひ前進

すべき命令に接す。

25日 第一大隊長赤沢少佐は前田少将の訓令に接し、二十四日午後十時大隊を集結し、夜間急行、二十五日午前二時清河城に侵入し、敗残兵を駆逐し

て同地に露營す。

午前十時追撃隊たる聯隊は、清河城に於て第一大隊と合し、第二大隊を

前衛として直に大嶺に向ひ前進す。

午後一時大嶺溝北方高地の敵は、我が前進路を扼して抵抗せしも、第五・

第六中隊直に之を撃攘せり。

日没の頃、聯隊は大嶺南方高地を占領せしも、敵は天嶮に抛り副防禦を

設置せるを以て、直に攻撃に転ずるは不利なるを以て、戦闘前哨を以て

夜を徹す。

26日 聯隊は前田少将の指揮下に入り、午後三時より大嶺の敵を攻撃す。仍て陶山少佐は第二大隊を指揮して敵の左翼を攻撃し、午後八時聯隊長は自

ら第八・第一・第四中隊を以て大嶺の正面に向て攻撃す。両攻撃方面共

に積雪股を没し、滑走転倒甚しく、攻撃意の如くならざりしも、敵は支

持すべからざるを知り、翌早朝遂に陣地を捨て、退却せり。

27日 陶山少佐は敵の退却を察知するや、直に一部を出して大嶺の最高地を占

領し、聯隊長は部隊を集結して追撃に転じ、急迫して三龍峪に達す。

時

に敵は五百牛泉西方一帯の高地に拠り我を瞰制せり。依て第一大隊をし

て仮称二〇三高地対稜線を占領せしめ、第二大隊を其の左翼に位置せし

め、戦闘準備の隊形にて露營す。

28日 前日隊形の儘敵と相對峙して露營す。是れ歩兵第二十二聯隊の未だ板成

峪より前進して我が右翼に連繫せざるを以てなり。

2月1日 午後二時十分、師団中央隊の五百牛泉西方約千百米突の高地（二〇三）を占領せんとするや、我が第一大隊は射撃を以て此の攻撃を援助せり。午後二時三十五分中央隊の該高地を確実に占領するや、我陣地前面鞍部の敵兵動揺の色見へしを以て聯隊長は第一大隊長赤沢少佐に突撃を命ず。少佐は第三中隊をして敵の側面を衝かしめ、自ら第一中隊及第五中隊の半部を率ひて正面より突入す。第三中隊は敵陣に突入する前に於て、既に其の過半を失ひたるも、第一中隊は正面の敵を駆逐して鞍部を占領し、退却する敵に多大の損害を与へたり。然るに我が右翼の敵は爆薬を投擲しつつ逆襲し来り。瞬時にして突撃隊の過半を喪失せしめたり。大隊長は叱咤激励苦戦大に努めしも、健康兵既に三十に充たず、剩さへ敵は盛に我が左側を猛射するに至り、且つ二〇三高地の中央隊も亦敵弾の爲め退却の止むなきに至り、孤立の弱勢を以て復た如何ともする事能はず。加之偶々大隊長負傷し幹部悉く殲れ、到底維持すべからざるを以て、終に旧陣地に撤退せり。第一大隊は戦闘に参与せざりし第四中隊の半部を合し、僅に七十名を以て旧陣地を守備し、散兵線上に於て夜を徹す。

2日 夜、補充員として予備歩兵中尉大磯文一以下二百十七名五百牛泉西方高

地に到着せり。

3日以後師団の各方面共に発展を見ず。仍て現状を維持して六日の夕に至る。

7日 第二大隊の左翼に位置せし高嶋中隊は、後備歩兵第五十九聯隊の志岐大隊と連繫して、漸次攻撃前進し、一本樹北方高地を占領せり。

8日 未明より師団は主力を以て牽制し、我が左翼隊をして独力馬群丹に向て前進せしむ。敵は既に退却を開始せしを以て、各隊は大なる抵抗を受く

ることなく午前七時馬群丹を占領するを得たり。

午後零時四十分、師団本隊の先頭に在て追撃前進中、午後五時聯隊（第

三大隊欠)は連刀湾附近の敵を撃攘し、同地附近に宿営すべき師団命令に接し、聯隊長は陶山大隊長をして右方高地より前進せしめ、聯隊長自ら第一大隊を指揮して左方高地より連刀湾に前進す。時、既に没し崎嶇たる山径羊腸たる坂路、加ふるに積雪脚を没し、行軍の困難実に言語に絶せり。

9日 午前三時、第一大隊は官山に於て敵と衝突せしも、前衛之を撃退し、天明後更に前進し、午後三時連刀湾に到着せるも、敵兵既に隻影を認めず。

仍て聯隊は師団に追及する為め急行し、午後十一時四十分撫順城を去る

半里強の製鉄所に至りて露營す。

10日 第三大隊は河村騎兵大佐の指揮下に入り前衛となり前進中、撫順北方高

地の敵砲兵陣地より砲撃を受けしも、大なる損害なく、敵退却するに及

びて再び前進を続行するを得たり。午後六時聯隊は全部大官屯に村落露

営をなす。

11日 撫順城南門外に集合し、師団本隊に在て追撃に加はり、午後四時金家楼

子に前進し、次で乱泥窪子に村落露營し、十三日に至る迄二日間同地に

滞らし休養を計り、傍ら隊伍の整頓に努。

14日 宿營地を瓢起屯に移転す。

本日歩兵大尉堀川忠文以下四百五十七名、補充員として到着す。

15日 我が鴨緑江軍の戦闘に関し左の勅語を賜ふ。

勅語

我力鴨緑江軍ハ城廠地方各所ノ敵ヲ駆逐シ清河城ヲ占領シ馬群丹及地塔ニ於テ優勢ノ敵ニ対シ沍寒氷雪ヲ冒シ激戦健闘シ多数ノ敵軍ヲ北方面ニ牽制シ以テ滿州軍ノ運動ニ便シ遂ニ之ヲ撃退シ窮追撫順ヲ抜キ其ノ退路ニ迫リ多大ノ損害ヲ与ヘタリ

朕深ク汝将卒ノ堅忍持久偉大ノ戦捷ヲ奏シタルヲ嘉ミス尚益々奮勵セヨ

奉答

城廠撫順間各地ノ戦闘ニ対シ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣景明等感激ノ至

リニ堪ヘス将来益々奮励以テ聖旨ニ副ハン事ヲ期ス  
右謹テ奉答ス

鴨緑江軍司令官男爵 川村 景明

皇后陛下ノ令旨

我カ鴨緑江軍八十数日猛進健闘氷雪ヲ踐踐シテ各地ノ城壘ヲ攻陥シ大敵ヲ  
控制シテ満州軍ノ方略ヲ扶ケ遂ニ撫順ヲ抜キ退路ヲ圧シ許多ノ損害ヲ蒙ラ  
シメタル趣皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ堅忍壯烈能ク大勲偉績ヲ  
奏シタルヲ深く御感賞アラセラル

奉答

撫順方面ノ戦闘ニ対シ特ニ優渥ナル令旨ヲ賜フ臣等感激ノ至リニ堪ヘス將  
来益々奮励シ誓テ懿旨ニ副ハン事ヲ期ス  
右謹テ奉答ス

鴨緑江軍司令官男爵 川村 景明

皇太子殿下ノ令旨

満州軍ト協カシ奉天附近ノ会戦ニ於テ撫順方面ノ大捷ヲ得タル鴨緑江軍ノ  
偉功ヲ嘆賞ス

奉答

撫順方面ノ戦闘ニ対シ特ニ優渥ナル令旨ヲ賜フ景明等感激ニ堪ヘス爾後益  
々奮励シ誓テ令旨ニ副ハンコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

鴨緑江軍司令官男爵 川村 景明

- 3月19日 軍の作戦地域は上台子・芭家庄子・茫屯以東となりしを以て、再び師団  
は営盤附近に転進することゝなれり。聯隊は午前八時瓢起屯を出発し、  
聯隊本部及第二大隊は前甸子、第三大隊は張家屯、第一大隊は二道房  
に舎営す。
- 3月20日 同地を出発し聯隊本部及第三大隊は石窟子、第二大隊は上勾、第一大隊  
は駅馬站到に舎営す。
- 21日 聯隊は午前八時宿営地を出発し、渾河の結氷上を渡過し、師団命令に  
基  
く駐留指定地に到着す。其の舎営区域左の如し、  
聯隊本部・第二大隊及第三中隊 城子後  
第一大隊 鉄貝山  
第三大隊 于馬河  
三部落共に人家稠密にして給養上の便宜を得ること多大なり。

陸軍歩兵少尉 河崎 和一

二月二十六日附任歩兵中尉

陸軍歩兵特務曹長 対島 新太郎

同 荒井 喜四郎

同 山中 頼秋

三月三日附任歩兵少尉

23日 陸軍歩兵大尉広瀬龍吉、歩兵第十二聯隊大隊長被仰付、本日着任し第

大隊長を命ぜらる。

陸軍二等軍医井口和十郎、免本職歩兵第二十二聯隊附に補せらる。

陸軍三等軍医野村庄平、歩兵第十二聯隊附被仰付・

30日 陸軍三等軍医安岡猶太郎、歩兵第十二聯隊附被仰付

4月1日 歩兵大尉前田市之介以下四百四十名補充員として城子後に到着す。

2日 陸軍歩兵特務曹長宮崎安吉、一月二十八日附歩兵少尉に任ぜらる。

予備見習軍医色国栄与、一月二十八日附陸軍三等軍医に任ぜらる。

4日 新任旅団長少将岡市之助、着団す。

11日 歩兵少尉相良巳都麿以下二百十二名補充員として到着せり。

歩兵約二聯隊、騎兵五六中隊、砲六門より成る敵は、蒼什附近に於て  
岩

谷支隊を攻撃して之を撃退し、南下の様あると同時に、永陵街道上  
に

敵の騎兵現出し、尚夏河に設置しありし我が通信所を襲ひしを以て、  
岡

少将は歩兵第四十三聯隊を基幹とせる一支隊を指揮し、二火羅方面に  
前

進せり。仍て聯隊長は一部を出して尚真刈の敵騎を撃攘せしめんとし、  
之を第一大隊長広瀬大尉に命ず。大尉は第一・第二中隊を以て夜間急  
行、十三日午前三時尚夏河に着せしも、敵兵既に退却の後なりしを以  
て、再び通信所を開設せしめ、第十二中隊より出すべき守備小隊の到  
着するを待て、十四日午前鉄貝山に帰還せり。

21日 陸軍歩兵大尉広瀬龍吉、四月十九日附歩兵少佐に任ぜらる。

陸軍歩兵中尉桑原栄次郎、四月十日附歩兵大尉に任ぜらる。

5月3日 軍は先進支隊を以て五鳳楼・年魚岑・二道岑の線を占領せんとするや、  
師団は岡支隊をして英額城を占領せしめ、其一部を以て年魚岑附近を  
占領せしめんとし、聯隊を岡少将の指揮下に入らしむ。仍て聯隊は午  
前八時宿營地を撤し、岡支隊命令に依り東蒼什に前進し、聯隊本部・

- 第一・第三大隊は東南蒼什に、第二大隊（第六中隊欠）は黄河路子に、第六中隊は黒石木に宿營せり。
- 4日 午前八時、聯隊は宿營地を出発し、八家に向て前進中、第二大隊及第二中隊を除くの外は、三家子以東豆腐屯間に宿營すべき命に接し、豆腐屯  
附近に舍營す。  
第六中隊は前日の支隊命令に依り、支隊の左側衛となり、午前七時黒石  
木より北折し、三道関より更に東折し、牛肺子勾を経て二道岑子に至て  
宿營せり。
- 5日 第二大隊は八家子を出発し、支隊の左側衛となり、三道背に向て前進し、第二中隊は二道岑に至りて東方警戒に任せり。  
聯隊の残余の部隊は、午前九時豆腐屯を出発し、八家子に前進し同地に  
宿營す。
- 7日 岡支隊は年魚岑及小白銀河の敵情偵察を施行せんとし、左側衛たる陶山大隊より一中隊を転馮河方向に出さしむ。第八中隊其任に当る。同中隊  
は午前二時夜行して小白銀河に到り、百余の敵を急襲し潰乱せしめて帰  
還す。  
第二中隊は警戒線を大林子の線に前進す。  
八家子宿營部隊は、依然同地に駐留せり。
- 9日 陶山大隊の工事援助の爲め八家子駐留隊より第三・第十一中隊を干長勾に派遣す。
- 10日 補充員として下士卒百四十八名、輸卒八名、代用馬卒二名、馬匹四十三  
頭到着す。
- 13日 八家子に滞在せし聯隊本部並びに第一・第三大隊は、支隊命令に依り英  
額城に前進を命ぜられ、新山大佐は中央隊となり、第三大隊及第一・第  
二中隊之に属し、歩兵第四十三聯隊と交代し、英額辺門附近に位置し、右翼高山陣地より左翼台山陣地に至る間の守備警戒に任じ、同時陶山大隊は左翼隊となり、第一大隊本部並に第三・第四中隊は英額城に位

置して予備隊となる。

14日 第三中隊は小白銀河方向敵情偵察の爲め、午前七時英額城を出発し、  
鷺

鷺溝にて敵騎約十と遭遇し小白銀河に於て約四十の敵騎より抵抗を受けしも、午後一時十五分之を撃退し同地を占領し、猶行進を続行し、大白銀河南方高地に防禦線ありて歩兵約三百現在せるを目撃し、午後五時半帰還せり。

31日 陸軍歩兵中尉岩沢敬一以下百六十名補充員として英額城に到着す。

6月4日 聯隊長大佐新山良知、三日附を以て陸軍省人事局恩賞課長に補せられ、歩兵大佐萩野末吉聯隊長に補せらる。

6日 敵情偵察の爲め、中尉村山磯二郎、少尉牧時輔、同田中清水は各一小隊を指揮し、午前六時英額心門東方鞍部を出発し、村山小隊は四廟子東南

方高地を、牧小隊は四廟子北方高地を、田中小隊は英咀聡子西方商地を

敵に向て前進す。然るに各方面共に敵に遭遇し、殊に牧小隊は数倍の敵

に攻撃せられ、十数名の死傷者を出し苦戦中、牧少尉負傷するに至り、遂に戦死者一名の死体を残して歩々の抵抗をなしつゝ退却せざる可らざるの悲境に陥れり。午前十一時三十分、支隊長は此報に接するや、広瀬少佐に第三・第四中隊を指揮せしめ、敵を撃攘して死体を收容し、且つ敵の工事を破棄せしむ。第一大隊（第二中隊欠）は直に英額城を出発し、四廟子の北方高地に両中隊を展開して前進するや、敵は退却を開始せしを以て之を追撃して焼跡附近に至り、能く任務を達成し、捕虜一を獲て、午後四時三十分英額城に帰還せり。

8日 新山大佐、出発、帰朝の途に就く。

9日 新任聯隊長萩野大佐、着任す。

11日 午後二時、敵の歩兵約三百、騎兵二三十騎、年魚岑東南方より我に向て前進し、午後四時四廟子西方高地に来て停止し、我陣地を偵察するものゝ如く、又同時歩兵一中隊は東部四廟子南方高地に前進し、其一部は

漸次鉢巻山陣地向で西進せり。仍て同陣地の守備たる第十二中隊は、之に向て射撃を開始せり。午後五時十五分、敵の砲兵二門は孤家子北方高地に放列を布き、鉢巻山に十数発の砲弾を発射し、午後六時に至り四和子の線に監視兵を残して全線退却せり。我第一線守備隊は警戒を厳にして夜を徹す。

13日 歩兵第十二聯隊附陸軍一等軍医中塚泰平、六月八日附を以て歩兵第四十四聯隊附被仰付、陸軍二等軍医吉川秀蔵、歩兵第十二聯隊附被仰付。

24日 予備陸軍歩兵見習士官 木村 伝  
同 三野 良晴  
同 瀬尾 宗齊

右任陸軍歩兵少尉（六月十日附）

30日 補充員として下士五名、兵卒百七十五名、輜重兵卒二名、輸卒十六名、馬卒四名到着す。

7月1日 陸軍歩兵中尉 高島 正俊  
同 田中 正躬  
同 市田 太郎  
同 高橋 徳次郎  
同 堀川 忠文

右任陸軍歩兵大尉（六月二十八日附）

5日 聯隊長萩野大佐は、歩兵第十二聯隊（第三中隊欠）、歩兵第四十三聯隊第二大隊（第二以下〔欠文〕）砲兵第二大隊（第四中隊欠）、機関砲第二小隊を指揮し、福家店附近に前進し、長南及小白銀河附近の敵情及地形の偵察に従事す。即ち聯隊は偵察隊命令に基き、午前三時英額辺門東方鞍部附近に集合し、藤田少佐の指揮する第十・第十中隊〔誤記あるか〕は前衛に任せられ、爾余の諸隊は本隊に在て前進す。午前七時二十分前衛は長尚李ノ家東方約千米突の地点を占領し、本隊は李ノ家南側に開進す。午後八時頃、北部岩山に敵の歩兵約一中隊陣地を占領し、次で歩兵約一中隊南部岩山に散開し、尚ほ敵の歩兵若干岩山東南高地に現出す。依て偵察隊長は第三中隊長堀川大尉に一小隊半を指揮せしめ、李ノ家北方谷地より其東方高地に沿ひ、小白銀河東端饅頭山の東北方約二千米突の高地方向を偵察せしむ。

第三中隊は、午前九時岩山東南小松林高地の敵を撃攘せしも、其後方千二百米突の高地に位置する敵は、前進を拒止して動かず。依て第三中隊の残部を増加して一中隊とし、更に砲兵第五中隊の一小隊に命じ、李ノ家北方高地に放列を布置せしめ、第三中隊の前進を援助せしむ。敵は砲火に驚き退却せり。第三中隊は之に猛烈なる追撃射撃をなし、多大の損害を与へ、正午偵察隊長の命令に依り、偵察を止め李家に帰来す。

午後三時、偵察隊長は目撃と諸種の報告に依り、偵察の目的を充分に達成せしを以て、諸隊に帰還命令を下さる。仍て聯隊も亦帰還の途に就き、午後八時我防禦線内に入り、偵察隊の編成を解かれ帰舎す。

陸軍歩兵少尉 大浜 石太郎

同	伊丹 政吉
同	武雄 俊一
同	舟橋 茂
同	宮本 義明

右任陸軍歩兵中尉（六月三十日附）

16日 陸軍歩兵大尉中村祐真、歩兵第十二聯隊中隊長被仰付。

23日 第一大隊長は午前二時三十分宿營地を出発し、歡喜岑附近の敵情偵察に

従事せしも、敵兵に遭遇せずして午後四時帰還せり。

8月16日 陸軍歩兵大尉津田増次郎、八月十四日附を以て歩兵第十二聯隊副官被仰付。

20日 御慰問使伊藤侍従武官、午前九時三十分英額城に着し、諸隊を一地に集合せしめ、畏き御沙汰を伝達せらる。

午後零時四十分、騎兵將校斥候より敵の歩兵千二三百、騎兵約三百、砲四門より成る一縦隊は、孤家子に向て前進中にして、其先頭は四廟子北方高地独立樹附近に達し、尚歩兵五百、騎兵約四十は哭咀認子に向ひ前進中なりとの報に接し、中央隊たる聯隊は直に緊急配備を取る。午後一時三十分、敵の歩兵約二中隊は四廟子北方高地上より我に向て前進し来り、尚ほ其の砲二門は同高地上に放列を布置し、我が左翼前進陣地及鉢巻山に向て砲撃を開始せり。然れども敵は午後二時三十分以後前進の模様なく、且つ砲兵も射撃を中止せり。仍て聯隊長は午後三時四十分、広瀬隊は風雨と雷鳴に乘じ急進、四廟子北方高地に出でしも、更に敵影を認めず。僅に敵騎の徘徊するを見るのみ。依て、尚ほ前進の無効なるを知り、午後七時三十分帰還の途に就けり。其他諸方向に出せし將校斥候も悉く帰還せしを以て午後十時旧の姿勢に復す。

28日 陸軍歩兵少佐陶山操、八月二十七日附歩兵第二十二聯隊補充大隊長に補

せらる。

歩兵少佐吉田宇平、歩兵第十二聯隊大隊長被仰付。

午前九時、鉢巻山守備隊長より、敵の歩兵約六百、騎兵約三百は四廟子

北方高地を我に向て前進中にして、其先頭は既に独立樹に達し、尚後続

部隊あるものゝ如しとの報に接し、聯隊長は第三大隊及第一中隊に警戒

配備を採らしめ、砲兵第五中隊の一小隊を鉢巻山北方陣地に、二小隊

を

鞍部附近の陣地及臼砲陣地に抛らしめ、第一大隊（第一中隊欠）を鉢巻

山西麓に招致す。

午前九時二十分、敵の歩兵約一大隊、騎兵一小隊、英咀晶子南方谷地に

侵入し、其歩兵は我が左翼陣地に散開前進するを見るや、臼砲小隊に射

撃を命ず。命中確實にして非常の効果を奏し、敵に多大の損害を与へた

り。其猛勢に恐れ敵は終に潰乱に陥れり。

同時に敵の一縦隊は四廟子北方高地を前進し来りしを以て、第十・第十

一中隊之に射撃を加へ、臼砲亦目標を交換し、其後続部隊を射撃せり。

午前十時、砲兵第五中隊（第一小隊欠）は敵騎約三百四廟子北方高地の

凹地に入らんとするを見、直に射撃を開始し、次で探射に移る。敵は射

撃の集注に堪へず、漸次北方に退却を開始せり。是に於て聯隊長は彼が

慣用手段たる退却を潰乱に陥らしめんとし、第一大隊長に急進を命ず。

第一大隊は敵に追及し、猛烈なる射撃を以て之を潰乱し、捕虜七を獲、

更に進で年魚岑西方高地を占領す。時に敵の大縦隊は小白銀河南方林縁

を退却中なりしを以て、直に砲兵に射撃を命ず。破裂の情況最も良好。

敵は多大の損害を受けたるものゝ如く、暫時にして散々伍々森林に遮蔽

せり。午後二時、追撃隊は隊伍を整頓し、前方に将校斥候を派遣し、敵

を認めざるに及で、午後六時帰還す。仍て中央隊は警戒配備を解き、平

時の姿勢に移る。俘虜の言を綜合するに、本日来襲せし敵は第五十四師

団及第七十一師団の一部にして、其兵力歩兵約二千、騎兵約五百、砲八

門なりしと。

- 30日 補充員として一二等卒百六十二名到着す。
- 9月5日 午前十一時四十分、敵の歩・騎兵約千、小白銀河方向より我に向て西進中なりとの報に接し、中央隊は直に警戒配備を採る。  
午後三時、四囃子北方に前進せし敵は、漸次退却の色を呈せしを以て、聯隊長は第九中隊に命じ、之を追撃せしめ、広瀬大隊の指揮下に入るや、直に四囃子北方高地より第九中隊に連繫して追撃を命ず。広瀬少佐は第一・第二中隊及砲兵第四・第五中隊を指揮し、瘤山西方高地に急進し、敵の縦隊小白銀河に退却中なるを認め、砲兵二中隊に放列を命じ、之を猛射せしめ、敵を潰乱に陥らしめ、午後七時三十分帰還せり。  
仍て中央隊は警戒配備を解く。
- 14日 日露両国軍の休戦条件協定委員は、昨十三日沙河子に於て会見し、同日  
午後七時二十分調印を了せり。  
其の協定せられたる休戦条件議定書左の如し、
- 第一条 満州全部ニ於テ戦闘ヲ中止ス。  
第二条 本議定書ト共ニ交換スル図面ニ示シタル日露両軍第一線ノ中間ヲ以テ離隔地帯トス。  
第三条 両軍ニ一般ノ關係ヲ有スルモノハ如何ナル口実ヲ以テスルニモ拘ラス離隔地帯ニ入ルヲ許サス。  
第四条 双廟子ヨリ沙河ニ至ル道路ヲ以テ両軍間ノ公用通路トス。  
第五条 本議定書ハ千九百〇五年九月十二日（露曆九月三日）正午ヨリ効力ヲ  
生ス。
- 16日 休戦を実施せんが為め、聯隊は歩哨のみを陣地に配置し、其他は悉く之  
を撤去し、爾後専ら將校下士卒の志気の振起と訓練とに努む。
- 26日 英額城支隊、練兵場に於て軍司令官川村大将の閲兵分列あり。聯隊の成  
績最も良好にして、如斯聯隊は能く三倍の敵に対するも尚ほ優勢なりと  
の賞詞を受けたり。
- 10月16日 第三大隊長陸軍歩兵少佐藤田富世、病気の処本日八家子舎營病院に於て死亡す。  
歩兵少佐曾見虎太、歩兵第十二聯謙大隊長に補せらる。  
十六日平和条約の批准は、本日発布せられ、日露両国の平和は克復せ

り。

是に於て岡支隊の編成解かれ、対敵動作を止む。

- 17日 聯隊長萩野大佐、滿州軍總司令部に出張を命ぜられしを以て、第二大隊長吉田少佐之を代理す。
- 11月14日 陸軍歩兵大尉大野虎太、中尉舟橋作戊、宮本義明、少尉浜村伝兵衛、下士以下四十七名、新兵教育係として補充大隊に帰還を命ぜらる。
- 12月7日 師団は凱旋準備の爲め宿營地を奉天營盤間に移転す。第三大隊は本日英額城を出発し、新宿營地たる李石塞に向て行軍を開始す。
- 9日 第一大隊は新宿營地たる金得勝屯に向て出発す。
- 12日 第三大隊は李石塞に到着し舎營す。
- 13日 聯隊本部及第二大隊は午後四時新宿營地たる三家子に到着す。聯隊長、滿州軍總司令部へ出張の処、十一月四日新宿營地に帰還せしを以て、吉田少佐の聯隊長代理を解く。
- 14日 第一大隊午後六時金得勝屯に到着す。
- 16日 以後は聯隊は隊中日課を規定し、射撃を奨励し、諸教練を研磨せしめて以て凱旋に至る迄に補充兵の如きも聯隊教練を終了するを得たり。
- 19日 午後一時三十分聯隊長は三家子練兵場に聯隊を集合し、勅語を奉読し、總司令官・軍司令官・陸軍大臣及師団長の訓示の大要を部下一般に伝達す。

陸軍歩兵中尉 小谷 義明

歩兵第六十二聯隊附被仰付（十一月十九日附）

- 12月25日 午後一時より李石塞南方凱旋練兵場に於て、旅団長、聯隊教練檢閲を施行す。

勅語

朕力親愛スル帝国陸海軍人ニ告ク

朕嚮ニ汝等ニ示スニ軍人ノ精神タル訓規五ヶ条ヲ以テシ明治二十七八年戰役終ルヤ深く邦家ノ前途ヲ念ヒ更ニ汝等ニ諭示スル所アリ爾來十閱年朕力陸海軍ハ世界ノ進運ニ伴ヒ經校大ニ其歩ヲ進メタリ不幸ニシテ客歲露國ト鬪ヲ開キシヨリ汝等協力奮勵各其ノ任務ニ從ヒ鼻婁宜キヲ得攻戰機ヲ制シ陸ニ洵ニ礦古ノ大捷ヲ奏シ帝国ノ威武ヲ宇内ニ宣揚シ以テ朕力望ニ副ヘリ朕ハ汝等ノ忠誠勇武ニ依リ出師ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ對シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ忠一スコトヲ得タルヲ憚ヒ深く其ノ戰ニ死シ病ニ愕レ又ハ癘瘡ト為リタル者ヲ悼ム

朕今露國ト和ヲ講ス惟フニ我軍ノ名譽ハ帝国ノ光榮ト共ニ更ニ汝等ノ責任ヲ重カラシメ國運ノ降昌亦汝等ノ努力ニ待ツコト大ナリ汝等其レ能ク朕力意ヲ体シ留リテ軍隊ニ在ル者ト散シテ郷閭ニ歸ル者トヲ問ハス常ニ朕力訓

諭ヲ服膺シテ朕力股肱タルノ本分ヲ守リ益々励精以テ報効ヲ期セヨ

明治三十八年十月十六日

御名御璽